

Social Dynamics in the Chotano Basin, Northern Peru : Formation and Change in a Prehistoric Andean Society

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-04-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山本, 睦 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003803

先史アンデスにおけるペルー北部チョターノ川流域 社会の形成と変遷

山 本 睦*

Social Dynamics in the Chotano Basin, Northern Peru:
Formation and Change in a Prehistoric Andean Society

Atsushi Yamamoto

本稿では、先史アンデスにおけるペルー北部チョターノ川流域社会の形成と変遷をめぐる社会的背景を論じる。はじめに、議論の基礎となる遺跡分布調査の成果を報告する。そして、調査で確認された諸遺跡の建築特徴と立地、遺跡間相互の関係や各遺跡と周囲の環境との関わり、および周辺地域社会との地域間交流の様態を示す。そのうえで、同流域で繰り返しひろげられた先史の長期的な人間活動の諸相を、とくに形成期（紀元前 3000 年～紀元前後）を中心に論じる。最後に、調査データと周辺地域の先行研究とを比較検討し、より広いコンテクストに位置づけることで、チョターノ川流域の社会動態をアンデス文明の多様な形成過程の一つのあり方として実証的に示すことを試みる。

結果として、チョターノ川流域社会の通時的展開において、地形と高度差に応じた多様な生態環境や鉱物資源などの利用に加えて、周辺地域との地域間交流が重要な役割をはたしたことが明らかとなった。また、チョターノ川流域でみられた社会変化は、周辺地域との共通性をもちながらも、同地域に独自の現象および過程であることが示された。

In this paper, I am going to discuss the formation and development of the Chotano basin society of northern Peru in the prehistoric Andes. First, I will present research results about regional settlement patterns; those results will be the basis for the subsequent discussion. Then I will consider the var-

*山形大学人文学部

Key Words : Andean Formative, settlement pattern, human-environmental interaction, inter-regional interaction, active choice

キーワード : アンデス形成期, セトルメント・パターン, 環境利用, 地域間交流, 能動的選択

ious aspects of the long period of prehistoric human activity in the Chotano basin, focusing particularly on the Formative Period (B.C.3000–A.D.1). The discussion will emphasize the architectural features and their location as our research has found them. Furthermore I will discuss inter-site relationships and the interactions of their inhabitants with their environment and with surrounding societies on a local and a regional scale. Finally, I want to show, by situating our data in a broader context—that is, comparing our research with available data from surrounding regions—, how the Chotano basin shows a unique and individual process, as one of the varied formation processes in Andean Civilization.

To sum up, regarding the diachronic changes in Chotano basin society, this paper will clarify the important role of interregional interactions and the maximal usage of several ecological environments and mineral resources according to topography and altitude. Furthermore, we will demonstrate how the diachronic social change in the Chotano basin is a phenomenon and process of its own, despite the similarities and coincidences with surrounding societies in northern Peru.

1 序論	5.1 形成期のセトルメント・パターンとその特徴
2 アンデス研究における本研究の位置づけ	5.1.1 パンダンチェ期
2.1 アンデスの編年体系	5.1.2 パコバンパI期
2.2 アンデスにおけるセトルメント・パターン研究	5.1.3 パコバンパII期
3 調査地の概要と先行研究	5.2 カハマルカ期のセトルメント・パターンとその特徴, および形成期との差異
3.1 調査地概略	5.3 周辺地域との比較からみるチョターノ川流域社会の特徴
3.2 チョターノ川流域および周辺地域の考古学調査	5.3.1 パンダンチェ期
4 チョターノ川流域の遺跡分布調査	5.3.2 パコバンパI期
4.1 遺跡分布調査の目的と方法	5.3.3 パコバンパII期
4.2 チョターノ川流域における地域間移動ルート	6 結論—チョターノ川流域社会の形成と変遷
4.3 遺跡分布とその一般的特徴	
5 チョターノ川流域のセトルメント・パターン	

1 序論

本稿の目的は、ペルー北部チョターノ川流域（図1）で実施した遺跡分布調査の成果にもとづき、先史、とりわけ形成期（紀元前3000年～紀元前後：表1）における、チョターノ川流域社会の形成および変遷の社会的背景を明らかにすることである。そのなかでもとくに、調査を通じて明らかになった諸遺跡の建築特徴や時間的・空間的位置づけ、遺跡間相互の関係や各遺跡と周囲の環境との関わり、周辺地域社会との地域間交流などを切り口として、チョターノ川流域のセトルメント・パターンについて、詳細に検討する。

ここでいうセトルメント・パターンとは、特定地域における遺跡分布というだけではなく、人々の活動の痕跡であるセトルメントを、その建築特徴や規模、出土遺物などから総合的に解釈した、遺跡相互の空間的有機的關係、およびそれらと生態系との關係の総体である。

後述するように、多様な生態環境を有するアンデスでは、文化生態学的関心にもとづいて、古くからセトルメント・パターン研究がおこなわれてきた（Willey 1953）。また、その後も、地域的多様性や国家形成などへの関心を背景にして、セトルメント・パターン研究は各地で実施された（e.g., Billman 1996; Pozorski and Pozorski 1987; Wilson 1988）。しかし、1980年代以降は、理論的背景の転換をうけて、社会変化における各地の歴史的多様性を追うことが重視されるようになった（Albarracín-Jordan 1996; Bandy 2005）。本研究もこの流れにあり、セトルメント・パターンを人々と環境との關係の総体としてとらえ、考古学データの背景にある人々の実践を論じる。人々の活動は、周囲の環境に制約を受ける一方で、常に環境に変化を与えるものである。そのため、人間と環境相互の多様な関わりあいのなかでつくりあげられるセトルメント・パターンが、いかに築かれ、変化したのかを考察することで、それを築いた先史の人々の活動をめぐる社会的背景にアプローチ可能になると、筆者は考える。

本稿で主に用いるのは、考古資料のなかでも地表面の遺構観察と遺物採集にもとづく遺跡分布データである。研究対象となるチョターノ川流域では、これまでに神殿とよばれる形成期の大規模な公共・祭祀建造物の発掘調査を中心に、様々な考古学的研究がおこなわれてきた。このことから本稿では、先スペイン期のなかでもとくに、研究の蓄積によって社会像がより明確な形成期に焦点をあてる。また、チョターノ川流域で実施されてきた先行研究の主な対象や関心は、特定の大規模遺跡や単なる住居址

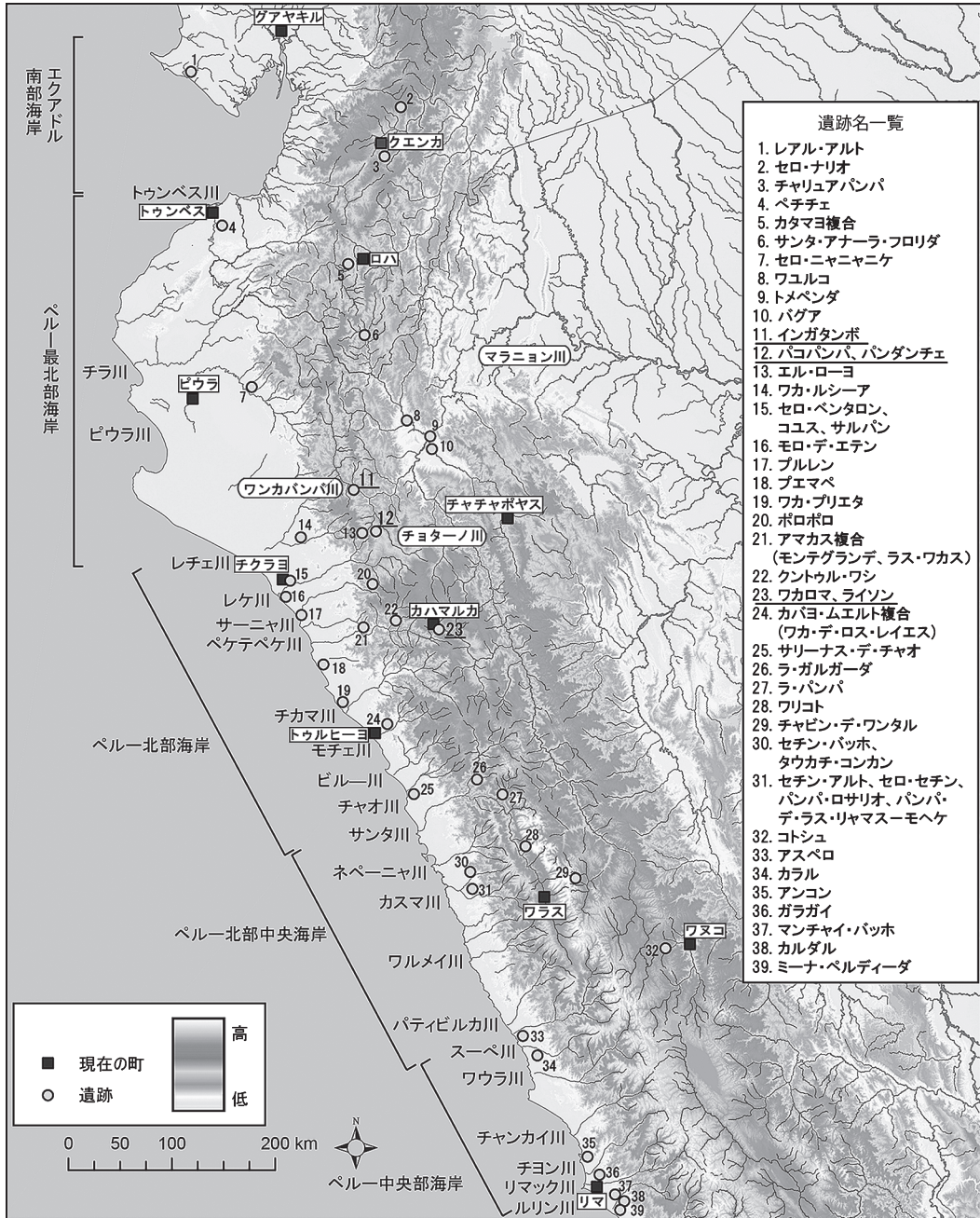


図1 チョターノ川流域および本稿で言及する遺跡とアンデス形成期の主要遺跡

山本 先史アンデスにおけるペルー北部チョコターノ川流域社会の形成と変遷

編年 地域	ペルー											
	最北部海岸		北部熱帯低地				北部山地					北部海岸
遺跡名	ピウラ	ハエン トメバンダ など	バグア バグア複合	ランカパンバ インガタンボ	チョコターノ川 ハコパンバ エル・ローヨ	カハマルカ ワコロマ ライソン	ヘケテベケ上流 クントウル・ワシ	ウラス チャピン・チ ウンタル	ウヌコ コトシュなど	ランパイエケ ワカルシーア など	ヘケテベケ下流 プエマベ	ヘケテベケ中流 ラス・ウカス など
1500	後期 ホライズン	インカ期	インカ				カハマルカ 晩期	インカ				
1000	後期 中間期	地方王国 期			チムー・インカ	カハマルカ 後期				後期シカン	チムー	
500	中期 ホライズン	ワリ期				カハマルカ 中期	ワリ			前期シカン		
0	前期 中間期	地方発展 期	ピクスモチエ			カハマルカ 前期		レクワイ	イゲラス			
250	前期 後半	末期	ピクス			カハマルカ 早期						
550	前期 前半	後期後半	チャビーカ	エル・ サラード		ライソン	ソテラ	ウラス	サハラ バタグ			
800	前期 前半	後期前半	ラ・エンカン ターダ		エル・ローヨ	EL	コバ	ハナ・リウ (チャピン)		モロ・デ・エテン		
1000	前期 前半	後期前半	パネシージョ	ラ・ベカ	インガタンボ	ハコパンバⅡ	後期ワコロマ	クントウル・ワシ	チャキナニ (チャピン)	コトシュ＝ チャピン	後期プエマベ	レチューサス
1200	前期 前半	後半	ニヤニヤニケ	セレスアル/ ミチナル/ トメバンダ	バグアⅡ	ハコパンバⅠ	後期ワコロマ	イドロ	ウラ・リウ (チャピン)	コトシュ	ブルレン/ ワカルシーア	中期プエマベ
1500	前期 前半	前半			バグアⅠ	ボマワカ	前期ワコロマ	セロ・ブランコ				テンブラデーラⅡ
2000	前期 前半	前半			モレリーヤ	バンダンチェ	前期ワコロマ	ラ・コンガ				テンブラデーラⅠ
2500	前期 前半	前半										アマカスⅡ
3000	前期 前半	前半										アマカスⅠ
	前期 前半	前半			ワンカパンバ				ワイラヒルカ			
	前期 前半	前半								ミト		

表1 チョクターノ川流域と関連地域の編年

とは想定されない遺跡へ集中的に注がれてきたという経緯がある。そのため、これまででは、限られた遺跡を除いて、チョターノ川流域という地域的枠組みにおける考古学的状況は、ほとんど不明であった。しかしながら、チョターノ川流域において、同時代かつ近距離に併存した諸遺跡が、なんの関わりももたずに、それぞれ独自に活動していたとは考えにくい。こうした現在の研究状況を乗り越え、先史社会についての新たな知見をえるためには、地域社会の全体像を把握する必要がある、それには遺跡分布調査にもとづいたセトルメント・パターンに関する研究が不可欠である。

さらに、形成期を中心にチョターノ川流域のセトルメント・パターンを論じ、その特徴を明らかにするためには、形成期以外の時期との比較という視点が必要である。そのため、本稿では、形成期とそれに続くカハマルカ期（紀元前後～後1532年）のセトルメント・パターンを比較することで、両者の特徴を浮かびあがらせる。

また、本研究が単なる一地域研究としてだけでなく、アンデス文明の形成過程をめぐる議論へ貢献していくためには、調査データやその分析および論考を周辺地域の先行研究と比較し、より包括的な論へと展開していくことが不可欠である。そのため、チョターノ川流域のデータを、その北に位置し、筆者が調査を実施してきたワンカバンバ川流域と、南東に位置し、日本のアンデス調査団¹⁾が長年調査に従事してきたカハマルカ盆地のデータを中心に比較検討することで、上記の問題に取り組んでいく。

以下では、はじめに、先行研究を概観し、本研究の位置づけを明確にする。次に、遺跡分布調査の概要とその成果をまとめる。この際、調査地の生態環境についても詳述する。そして、遺跡分布調査の成果に、データの蓄積がすすむパコパンバ遺跡の発掘調査成果、および周囲の環境と地域住民へのインタビューをふまえた隣接地域との地域間移動ルートに関するデータを加味して、チョターノ川流域におけるセトルメント・パターンの通時的変遷を明らかにする。最後に、チョターノ川流域固有の歴史性を重視しつつ、導かれた考察結果を周辺地域社会の状況と比較検討することで、アンデス文明形成の多様な社会過程の一端を示していく。

2 アンデス研究における本研究の位置づけ

本節では、まず本稿で用いる編年について述べる。次に、先史アンデスのセトルメント・パターン研究と、調査地であるチョターノ川流域の考古学調査に関する先行研究を概観することを通じて、本研究の位置づけや意義を明確にしていく。

2.1 アンデスの編年体系

アンデスの編年体系は大きく二つある。一つは、発展段階的な時期区分をもち、日本やペルーで多く用いられるものである（ルンブレラス 1977（1974））。そして他方は、発展段階的時期区分を否定したアメリカの研究者を中心に利用される編年である²⁾（Rowe 1962）。前者の編年体系には、段階で示された時期内の多様性を覆い隠し、単純で連続的な社会進化主義的歴史観を有するという問題がある。ただし、文明の形成過程を一貫した流れのなかでとらえようとする際には有効な視点をもっており、本稿ではこの編年を用いる。その最大の理由は、チョターノ川流域やその周辺地域、とくに比較対象となるワンカバンバ川流域とカハマルカ盆地でこの編年が用いられているためである。このことから、効果的かつ精緻な論考をすすめるうえで、この編年体系を用いる利点は非常に大きい。

本稿の中心となる「形成期」とは、文化進化論から提起された、国家にいたる発展段階の一区分である（Strong and Evans 1952）。形成期の指標には、農耕定住や土器製作の開始、神殿などの公共建造物の建設といった諸要素のセットがあげられる（井口 1998; 加藤・関 1998; 大貫・加藤・関 2010）。ただし、アンデス形成期社会は、国家と称されるような社会へと連続的な展開はみせなかったため、形成期とは、国家の前段階ではなく、文明の多様な形成過程の一つであるといえる。また、形成期以降の時期については、地方発展期やワリ期といった時期区分も存在するが、本稿では調査成果をもとに形成期から連続する精緻な編年が組まれているカハマルカ盆地の編年の枠組みのなかで（Terada and Onuki 1982; 1985; 1988; 渡部 2004）、これを論じる。

最後に、本稿で用いる地域区分について記述する。一般に、アンデス地帯は、太平洋岸より東に向かって、海岸、山地、熱帯低地からなる。しかし実際には、その区分はより多様であるため、本稿では、アンデス山脈から太平洋に注ぐ多数の河川を用いた、海岸部を基準とする地域区分を用いる。したがって、トゥンベス川以南ピウラ川以北は「最北部海岸」、レチェ河谷以南サンタ河谷以北は「北部海岸」、サンタ河谷以南スーベ河谷以北は「北部中央海岸」、スーベ河谷以南ルリン河谷以北は「中央海岸」となる。また、山地や熱帯低地における区分は、海岸部に比べて境界が曖昧であるため、海岸部の区分をそのまま東延して、「北部山地」や「北部熱帯低地」と記す。

2.2 アンデスにおけるセトルメント・パターン研究

アンデスにおける人間と環境との関係については、長い研究の歴史がある（e.g.

Steward and Faron 1959)。そして、特定の遺跡を対象とするのではなく、地域の枠組みのなかで人間と環境の関係を考察するのが、地理学と文化生態学の影響を受けて展開したセトルメント・パターン研究である (Anschuetz et al. 2001; Kowalewski 2008)。

アメリカ大陸でおこなわれた最初のセトルメント・パターン研究といわれるペルー北部海岸ブルー川流域の調査の目的は、文化変化の要因として人々の環境への適応を念頭に (スチュワード 1979 (1955)), 経済システムや社会政治的組織を再構築するといった文化史の復元であった (Willey 1953)。これは、考古資料を特定地域内で空間的・時間的に位置づけることを通じて、考古資料から人間の行動を論じようとしたものである。こうした基本的なスタンスはその後引き継がれ、セトルメント・パターン研究は、1960年代以降になると、地域の枠組みのなかで、劇的な一度の文化変化ではなく、一連の変化としての過程を追求するようになった (ウィリー, サブロフ 1979 (1974): 287-296)。プロセス考古学と呼ばれるこの理論的潮流は、アンデス研究において今日でもいまだ影響が強い。これらの研究は、新進化主義と一般システム論、生態学的アプローチをとりいれ、仮説演繹的手法を用いて文化変化の過程を探求、説明することを中心課題とするものであった (Binford 1962; Binford and Binford 1968; Flannery 1972; Renfrew and Cherry 1986; Willey and Sabloff 1993)。また、人間の行為の一般法則を追及し、客観性を求めて検証可能性を重視したのもこれらの研究の特徴である。

しかし、このころのアンデス研究では、発展段階的な編年や社会進化の構図が有する問題性が議論されはじめた。そして、その結果として1980年代になると、各地でデータを蓄積、統合し、地域的多様性を意識しながらも国家形成といった社会過程をより広い視野で解明するという方向性がうまれた (Billman 1999: 3-4; Burger 1985: 272; Haas 1987: 2-4)。そして、遺跡の空間的・地理的位置関係や遺跡間の機能と生態系との関係、および多様な環境利用といった諸問題が、各地で研究されるようになった (e.g., Daggett 1984; Proulx 1968; 1973; 1985; Silva 1996)。地域レベルの変化を追う際に、セトルメント・パターンが最も重視されていた時期でもある。

たとえば、北部中央海岸カスマ川流域の調査では、セトルメント・パターンの変化と図像表現から、沿岸部と内陸部および流域外部との関係が考察され、形成期の社会過程が論じられた (Pozorski and Pozorski 1987: 125-132)。また、北部中央海岸サンタ川流域の事例では、セトルメント・パターンの変化と建造物の形態、流域の人口と人口支持力との関係から、戦争の発生が想定され、それを軸に社会変化が論じられた (Wilson 1988: 137-138)。

こうした状況のなかで、1980年代以降になると、プロセス考古学への批判から、ポストモダニズムの影響を受けて、ポストプロセス考古学、あるいはコンテクスト考古学と称される新たな理論的展開がうまれた。そうしてあらわれたのが、各地域社会の個性や歴史性に着目し、社会変化における個人の役割に主眼をおく研究である(e.g., Hodder 1982; Shanks and Tilley 1987; Yoffee 1993)。つまり、それまでにおこなわれてきたような社会変化およびその過程の画一的あるいは普遍的モデルの提示からぬけ出して、歴史的多様性を追う研究が重視されるようになったのである。これは、特定の考古学的状況(遺構や遺物の分布など)を特定の人間行動に単純に結びつけることへの批判でもあった。その結果、セトルメント・パターン研究にも変化が生じた。

その一例が、盆地などの地理区分を超えて汎地域的枠組みで考古学的現象をとらえようとする研究や(Balkansky 2006)、セトルメント・パターンと社会の政治的中心の変化とが連動しないというオルタナティブな社会変化モデルを示す研究(McIntosh 1999)、ローカル社会の主体性を重視し、その社会成員間の関係性やローカル社会と地域社会全体との関係性を追求する研究(Albarracin-Jordan 1996; Bandy 2005; Goldstein 2000)である。

また、景観という概念を切り口に、物質文化を築いた当時の人々の行動や経験、認知に迫ろうとする研究も同じ流れに位置づけられる(e.g. Anschuetz et al. 2001; Ashmore and Knapp 1999; Kowalewski 2008; Staller 2008; Trigger 1990; Tilley 1994)。こうした研究でとられる現象学的アプローチによれば、空間や場所は、社会的行為のなかに埋め込まれた存在となり(Tilley 1994: 10)、その結果、セトルメント・パターンは様々な形で人間の行為や思考、経験が介在するものと理解されるようになった。

これらの研究のアンデスにおける事例としては、建造物の視覚効果や空間構造に着目した研究や(Moore 1996; 2005)、環境の自然的・人為的变化と権力の生成といった社会政治的变化の研究(Contreras 2007; 2010)などがあげられよう。

なお、こうした理論面での変化に加えて、セトルメント・パターン研究に大きな変化を与えたものに、GIS(地理情報システム)といった技術的側面の変化がある(金田ほか 2001; 宇野 2006)。その詳細は後述するが(4.2に記述)、アンデスでも近年におけるセトルメント・パターン研究やそれと関連するルート研究において、GISが積極的に用いられている(e.g. Contreras 2011; Tripcevich 2007; 山本 2014; 山本・伊藤 2013)。

しかしながら、すべてのセトルメント・パターン研究、あるいは遺跡分布をめぐる研究が、既述の理論的枠組みと密接に関連づけながら展開されてきたわけではない。

そうした事例の一つが、開発に伴う遺跡分布調査である (Ravines 1983)。また、先に述べてきたような理論的背景を明確にかかげなくとも、現在では、先行研究の蓄積によって各地に展開した諸社会の成立や変化の過程で多様性が明確に認識されるようになってきた。このようにして、特定地域の考古学的状況 (遺跡間関係や遺跡と環境との関係) を理解するために、遺跡分布調査が実施されることは多い (井口ほか 2002; Toshihara 2002; 鶴見 2008a)。むしろ、こうした理由から、地域レベルでの社会変化を考察するために、特定地域のセトルメント・パターンの変遷が追求され、研究が遂行されてきたというのが実状であろう。

こうした状況のなかで注目すべきは、現在では特定の地域とその他の地域を比較検討しながらも、各地域固有の歴史性が強調されて社会変化が論じられることであり、本研究も同様の立場にたつ。また同時に、社会はひとりでに変化するようなものではなく、その変化は社会成員の主体的実践によってもたらされるため、本稿では、社会における行為主体者の能動的選択を重視する。これらは、上述した近年の理論的枠組みのなかで重要視される固有性や歴史性、あるいは社会における個人の役割に重きをおいたものである。

言いかえれば、セトルメント・パターン研究において、人間と環境との相互作用を、データの背景にある先史の人々の実践をふまえてとらえることに、本研究の重要性がある。そして、セトルメント・パターンの通時的変化を明らかにし、流域社会がいかになら形成され、変化していったのか、その社会的背景を多面的に検討していかなければならない。また、地域固有の歴史性を重視しながら、周辺地域社会との比較を通じて、マクロな視点から多様な社会過程の一つの道筋を示すことが肝要である。

3 調査地の概要と先行研究

本節では、まず、後の論考と深く関わる研究対象地域の生態環境について記述する。次に、調査地における先行研究を総括し、本研究の位置づけをより明確にしていく。

3.1 調査地概略

チョターノ川は、アンデス山脈分水嶺の東側を北に流れ、ワンカバンバ川と合流してチャマヤ川と名を変えたあとで、マラニョン川へと連なる。その源流は、カハマルカ県チョータ市近郊の山々から流れる河川やケブラータ³⁾にある。ペルーの季節は、大きく雨季 (10～4月) と乾季 (5～9月) に大別される。乾季になると水量が激減

する河川も多いが、チョターノ川は、常に豊富な水を蓄えている。また、その流域面積は広大で、中心的な部分だけでも 1,875 km² ある (ONERN 1977)。本調査範囲は、正確に言えば、流域のなかでもパコパンバ遺跡を中心としたチョターノ川下流域西岸であり、行政的にはカハマルカ県のチョータ郡とクテルボ郡に属する (図 2)。

一般にアンデスは、その複雑な地形と高度差がおりなす多様な生態系で著名である。その代表的分類として広く用いられるのが、ペルーの地理学者ハビエル・プルガル・ビダルによる分類である (Pulgar Vidal 1987)。これによると調査地域は、高度に応じて、ユンガ (海拔 1,000 ~ 2,300 m)⁴⁾、ケチュア (海拔 2,300 ~ 3,500 m)⁵⁾、スニ (海拔 3,500 ~ 4,000 m)⁶⁾ から構成される。

こうした環境区分や、海拔が高くなるにつれて気温が下がり、湿潤になるというアンデスの一般的特徴は、調査地においても概ねあてはまる。しかしながら、チョターノ川流域は、アンデス東斜面に位置し、ペルーのなかでも高緯度地帯にある。そのため、標準的に語られるアンデスの気候や生態環境よりも明確に熱帯的特徴を有しており、多雨多湿である。たとえば、乾季の中心となる 6 ~ 8 月ではあまり雨は降らないものの、乾季の最初 (5 月) と最後 (9 月) にはまとまった降雨もみられる。また、雨季のなかでもとくに 1 ~ 3 月の降水量は他の月よりも多いのである (ONERN 1977: 35-42)。

こうした調査地周辺の気候や生態環境に関しては、70 年代に刊行された ONERN (Oficina Nacional de Evaluación de Recursos Naturales: ペルー国立自然資源評価局) による詳細な報告がある。そのなかで調査地の気候と生態環境は、高度や地形、湿度と気温といった諸要因などから、それぞれ五つに分類されている (ONERN 1977: 65-81)。ONERN とプルガル・ビダルの分類は基本的に対応しているが、以下では、本稿の議論とより深く関わる ONERN による生態環境の分類を中心に、調査地をとりまく状況を記述する。これには、二つの分類を併記することによる混乱を防ぐというねらいもある。

・有刺植物地帯 - 熱帯丘陵帯 (Monte Espinoso - Premontano Tropical: 表 2 では①)

海拔約 1,500 m 以下の土地に広がり、その上部には次に記述する乾燥森林地帯 - 熱帯丘陵帯が位置する。温暖 (年平均 17 ~ 23°C) で降水量 (年平均 250 ~ 500 mm) は少ない。サトウキビ (*Saccharum officinarum*)、トウモロコシ (*Zea mays*)、バナナ (*Musa spp.*) などが栽培される (ONERN 1977: 67-68)。このほかにも、踏査時にはマンゴー (*Mangifera indica*)、アボカド (*Persea americana*)、マニオク (*Manihot*

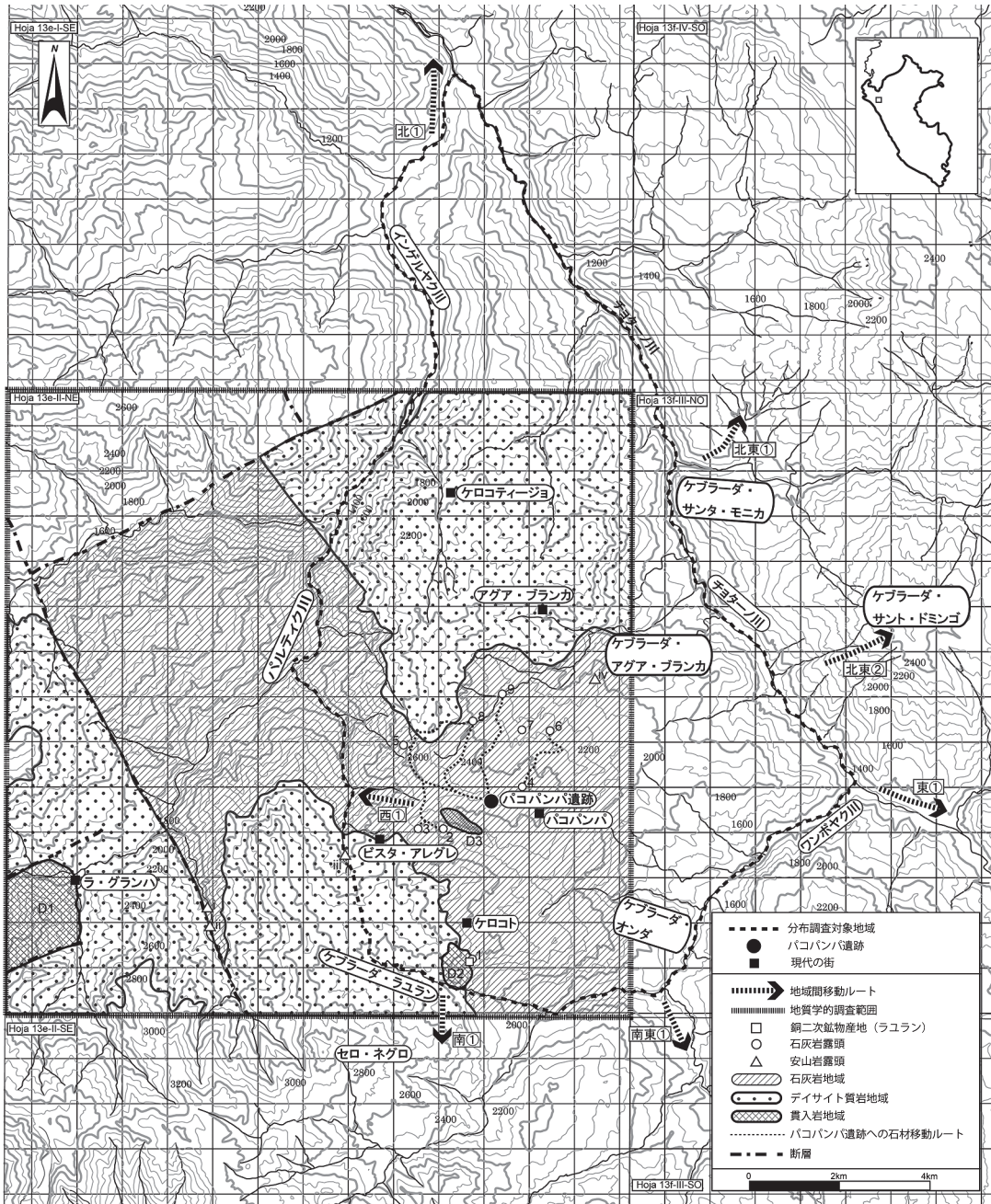


図2 調査範囲とバコパンバ遺跡および生態学的・地質学的特徴

esculenta) が、とくに北部のケロコティージョ市近郊ではパイナップル (*Ananas comosus*) の栽培も確認された。

・乾燥森林地帯－熱帯丘陵帯 (Bosque Seco – Premontano Tropical : 表2では②)

おおよそ海拔 1,500 ~ 1,800 m 以下の土地に広がる。温暖 (年平均 17 ~ 20°C) で降水量 (年平均 500 ~ 900 mm) はやや少ない。その下部は有刺植物地帯－熱帯丘陵帯と、上部は次に記述する乾燥森林地帯－熱帯低山帯に面する。サトウキビ、トウモロコシ、バナナのほか、チリモヤ (*Annona cherimola*) などの果物も栽培される (ONERN 1977: 68-70)。このほか、踏査時にはマニオクやコーヒー (*Coffea sp.*) の栽培がみられ、北部ではパイナップルの栽培も確認された。

・乾燥森林地帯－熱帯低山帯 (Bosque Seco – Montano Bajo Tropical : 表2では③)

海拔 1,800 ~ 2,500 m 程度の土地に広がり、その下部は乾燥森林地帯－熱帯丘陵帯と、上部は次に記述する湿潤森林地帯－熱帯低山帯に接する。やや温暖 (年平均 13 ~ 17°C) で降水量 (年平均 500 ~ 1,000 mm) はやや少ない。多くの人口を有する地帯で、トウモロコシ、マメ類、ムギ類などといった様々な作物を栽培することが可能である (ONERN 1977: 71-72)。なお、踏査時には、マメ類は全体的に、トウモロコシは海拔のより低い地点を中心に栽培されていることが確認された。また、より海拔の高い場所では、ムギ類の栽培や、ウシ (*Bos taurus*) などの家畜飼育が多く認められた。

・湿潤森林地帯－熱帯低山帯 (Bosque húmedo – Montano Bajo Tropical : 表2では④)

概ね海拔 2,500 ~ 2,800 m までの土地に広がり、上限は後述する湿潤森林地帯－熱帯山地 (Bosque húmedo – Montano Tropical)、下限は先述の乾燥森林地帯－熱帯低山帯と接する。やや温暖 (年平均 13 ~ 17°C) で降水量 (年平均 1,000 ~ 2,000 mm) は多い。農耕はもとより、家畜飼養や木材利用に適した環境とされる (ONERN 1977: 72-73)。踏査時には、マメ類やムギ類を中心とした栽培がみられた。

・超湿潤森林地帯－熱帯山地 (Bosque muy húmedo – Montano Tropical : 表2では⑤)

おおよそ海拔 2,800 ~ 3,800 m までの土地に広がり、下限には先述の湿潤森林地帯－熱帯低山帯が位置する。寒冷 (年平均 6 ~ 12°C) で降水量 (年平均 1,000 ~ 1,600 mm) はやや多い。ジャガイモ (*Solanum tuberosum*) などの根菜類とムギ類を中心に、マメ類も栽培される。また、より海拔の高い地点では、良質の牧草が育つため、

家畜飼養などに非常に適した環境となる (ONERN 1977: 76-77)。踏査時にも上記の傾向が明確に認められた。

このように調査対象地域では、高度に応じて多彩な作物が生産されるほか、森林を中心に、シカ (*Cervidae*) など種々の動物が生息している。河川での漁撈活動はあまり認められないものの、非常に豊かな生態環境を有するといえる。しかし実際には、既述の生態環境が特定の高度で明確に区分されているわけではない。また、限定された範囲で徹底的に実施される遺跡踏査では、植生や栽培作物の変化は極めて流動的に認められる。さらに、各生態環境の上限や下限では、分類された複数の環境が混在することから、その境界は不明瞭でもある。そのため、ミクロな環境区分を地図上に正確に反映させることは、現状では困難である。そこで本稿では、踏査中に実見した植生や栽培植物の変化を考慮しつつ、生態環境区分には既述の分類基準となる海拔を参照することで、この問題に対処していく。

その一方で、当該地域の地質学的特徴については、ONERN (ONERN 1977) と、日本のアンデス調査団による報告がある (清水・清水 2010; 清水・清水・中島 2011; 2012)。なかでも、後者の調査は、考古学を中心とした学際的かつ詳細な地質学的、岩石学的研究であり、パコパンパ遺跡を中心に研究がすすんでいる。これによれば、本調査対象地域は、主として石灰岩含有地域とデイサイト質溶岩地域、貫入岩地域から構成される。また、石灰岩露頭や、安山岩露頭や銅二次鉱物 (マラカイト・アズライト) の産地なども確認されており、パコパンパ遺跡で利用された石材の産地同定もおこなわれている。当該地域における資源利用について、論じる基礎が築かれているといえよう。研究対象地域の地質学的特徴は、図2に示した通りである。パコパンパ遺跡で用いられた石製品のうち、安山岩に関しては、セロ・ネグロから流れるケブラーダ (安山岩露頭 i と ii) に沿って、そのなかでもとくに下流域で採取されたと考えられている (清水・清水 2010)。その産地は、本遺跡分布調査の範囲外ではあるが、パコパンパ遺跡から約 6 km しか離れておらず、徒歩でも一日以内で往復が可能である。

以上の生態環境の分類と地質学的特徴は、セトルメント・パターンを論じる際に極めて重要であり、議論を展開させるうえで、有益な視座をもたらす基礎データである。なぜならば、調査地域をとりまくこうした多様な環境は、生業や交流をめぐる様々な活動や戦略の存在を想起させるためである。ただし、分類された生態環境の位置、そして地質学的特徴による遺跡の建材や加工品に用いられた石材の産地についての情報は、詳細な地形をふまえた遺跡分布図にもとづき、よりミクロな視点から対象社会を

考察した際に、その重要性が明らかになると考えられる。そのため、セトルメントと生態環境および地質学的特徴との関係については、遺跡分布調査のデータの概要を示したあとで、セトルメント・パターンの成立や通時的変化をめぐる分析、および考察において詳しく論じる。

3.2 チョターノ川流域および周辺地域の考古学調査

本調査対象地域は、チョターノ川流域のなかでも首都リマや近郊都市からのアクセスが悪い場所にある。しかし、それにもかかわらず、ペルー考古学史上有数の重点的かつ長期的な研究が実施されてきた場所の一つでもある。その最大の理由が、この地域に存在する形成期の大神殿遺跡パコパンパの存在である。この遺跡を中心にペルー国立サン・マルコス大学が主体となって、これまでに様々な調査が実施されてきた⁷⁾。神殿とは、単なる居住施設ではなく、公共建造物や祭祀建築ともよばれる。そして、公共的・記念碑的・宗教的側面をもち、社会的統合の中心かつ交流の場であって、形成期社会の展開に大きな役割をはたしたと考えられる建造物である (e.g. 加藤・関 1998; Burger 1992; 山本 2012)。そのため、形成期の社会的状況を理解するという目的において、当該地域最大の神殿遺跡パコパンパで、これまでに様々な調査・研究がおこなわれてきた。

パコパンパ遺跡は、チョターノ川の西岸、海拔 2,550 m に位置し、行政上はカハマルカ県チョータ郡ケロコト地区パコパンパ村に属する。遺跡の中心部は、自然の地形を利用して築かれた 3 段の大基壇からなる。その上部には大小の基壇建造物や方形半地下式広場、円形構造物が築かれ、基壇下には大水路あるいは地下回廊が設けられているほか、複数の石彫も確認されている。そして先行調査からは、このパコパンパが、ペルー北部でも有数の形成期の大神殿であり、北部熱帯低地や北部海岸、あるいは南北の山間部に存在した諸社会と密接な交流をもった社会であったことが示唆されてきた。また同遺跡は、形成期だけでなく、それに続くカハマルカ期にも利用されたことが認められている。こうしたサン・マルコス大学主体の考古学調査を通じて集積された基礎的データは、パコパンパ遺跡の利用時期や出土遺物の一般的特徴などを明らかにすることにつながっており、これまでのアンデス形成期研究に寄与してきた (Fung 1975; Morales 1980; Rosas and Shady 1970; 1974)。

しかしこれまでは、様々な研究者の手で複数の調査が、しかも各自のスタイルで実施されてきた。また、複数の調査者間で出土データや議論が総合されることはなかった。そのため、各研究者によって、遺跡に対する解釈が異なるだけでなく、遺跡編年

の時期名称といった基礎部分にも相違が認められるなど、研究状況は錯綜的でもあった。

こうした状況に新たな展開をもたらしたのが、2005年より実施されている日本のアンデス調査団とサン・マルコス大学との共同調査である。この調査は現在も継続中で、アンデス形成期研究では類をみないほどの学際的かつ精緻なデータが蓄積されつつある（関 2006; 2010; Seki 2014; Seki et al. 2006; Seki et al. 2010）。また、この調査では、最新の調査成果に先行諸研究の成果を統合することで、神殿建築や関連出土遺物の特性をはじめ、パコパンパ遺跡を中心とした地域社会の動態を解明してきた。

その結果として、パコパンパ遺跡では形成期にパンダンチェ期（紀元前 1500～1200年：形成期前期）、パコパンパⅠ期（紀元前 1200～800年：形成期中期）、パコパンパⅡ期（紀元前 800～550年：形成期後期）の活動が認められることが明らかになった。ただし、パンダンチェ期については、土器の包含層が検出されているだけであり、その詳細は不明である。その一方で、パコパンパⅠ期からは、度重なる神殿の増改築と関連しながら、様々な活動が神殿で執りおこなわれていたことが、明らかにされてきた。

より具体的には、パコパンパⅠ期には3段の大基壇とその上に載る様々な小基壇や円形構造物が建設された。また、パコパンパⅠ期には奢侈品もあらわれ、北部山地や北部熱帯低地との共通性を示す複雑な図像表現装飾をともなう精製土器に加えて、北部海岸でクピスニケと称される土器もわずかながら認められるようになった。さらに、基壇上に築かれた建造物では、火を用いた儀礼を推測させる多くの痕跡も確認されている。なお、パコパンパⅠ期には、トウモロコシの利用がはじまり、極めて少量ではあるが荷駄獣とされるラクダ科動物骨も出土するようになる（関 2006: 171–177）。

パコパンパⅡ期になると、建造物や出土遺物に大きな変化があらわれる（関 2006: 177–185）。神殿が増改築され、パコパンパⅠ期の建造物を埋めたうえに、新たな建築軸で基壇や部屋状構造物が築かれたのである。この建築軸は、アンデスで農耕の開始と関係が深いとされる星座スバルの出現方向と一致しているという（Sakai et al. 2008: 62–66）。また、パコパンパⅠ期にみられた土器は姿を消し、かわって還元焼成でよく研磨された土器などの北部海岸や北部山地との共通性の高い土器がみられようになる。さらに、海水生種の貝や黒曜石のほか、留ピンや針、あるいはノミ形を呈した金属加工具と考えられるような銅製品が多く確認されはじめる（荒田ほか 2012; 荒田 2013）。この銅の産地は、パコパンパの南約 3.5 km、現在のケロコト市に近い場所に

あるケブラーダ・ラユランに位置している。また、パコパンパ遺跡では、銅製錬を示唆する鉱滓や銅製錬産物である酸化銅および粗銅が出土しており、調査者らはパコパンパで銅生産がおこなわれていた可能性を指摘している（関 2010: 185; 荒田ほか 2012; 荒田 2013）。さらに、銅の製錬に関しては、パコパンパⅠ期の終わりには開始されていたことも示唆される（荒田ほか 2012; 荒田 2013）。このほか、トウモロコシやラクダ科動物の利用は、パコパンパⅠ期よりもより顕著になったようである。

注目すべきは、パコパンパⅠ期からパコパンパⅡ期への神殿の増改築に際して、金製品を伴う特殊な墓が基壇内部に築かれたことである（Seki 2014）。「パコパンパの貴婦人」と命名されたこの墓には、金製品以外にも海岸部に顕著な特徴を有した完形土器や、海水生種の貝製品などが副葬された。そのほか、被葬者には辰砂と藍銅鉱が塗布されており、アンデス形成期においても非常に特異な事例であるといえる。また、パコパンパ遺跡で出土した土製小容器に金粒が付着していたことが明らかになっており、金の製錬がおこなわれた可能性も指摘されている（荒田ほか 2012; 荒田 2013）。

さらに、神殿には、動物と人物が融合した図像を施した石彫が存在したことも判明している（関・オルドーニェス 2013）。

これらのことから、パコパンパⅡ期の社会には階層性が顕在化し、その背景にはパコパンパのリーダーによる神殿をめぐる活動の管理、とくに地域間交流を通じた希少な奢侈品の入手とコントロールがあったことが推測されている（関 2010: 196–198）。

なお、この調査では、カハマルカ期に、パコパンパ遺跡が部分的に再利用されていたことも確認された。形成期と比較した場合、カハマルカ期の状況はあまり明確ではないが、少なくともカハマルカ前期、後期、晩期の活動の存在が示唆される（関 2014）。

その一方で、チョターノ川流域には、パコパンパ遺跡以外にも調査がおこなわれた遺跡がいくつもある。そのうちの代表的なものが、パコパンパ遺跡から東側へテラスが連続する場所にあるカピーリヤ遺跡（Morales 1980; 1998）とミラドール遺跡（Flores 1975）である。これらの遺跡では、小規模な発掘調査がおこなわれ、パコパンパ遺跡と並行する形成期中期と形成期後期の活動が認められた。また、両遺跡が、パコパンパ遺跡から連続する尾根上にあり、パコパンパ遺跡の建築軸とも関連することから（関 2014）、全体として巨大な遺跡複合であったとも考えられる。なお、カピーリヤ遺跡とミラドール遺跡では、いずれもカハマルカ期の活動が認められている。報告では、それぞれカハマルカ後期とカハマルカ期初頭（早期～前期）の活動の存在が指摘

されているが、ミラドール遺跡出土土器の図面では、カハマルカ中期～晩期の土器しか確認できない。さらに、パコパンパ遺跡の至近にある遺跡として、上記の2遺跡とは反対側に連続するテラス上にあるバルデラマ遺跡があるが、その詳細は不明である(Shady 1983: 20–21)。このバルデラマ遺跡に関しては、今回の踏査の結果、パコパンパ遺跡と一連のものとしてとらえている。

このほかに、チョターノ川流域で、パコパンパ遺跡に匹敵するほど名をはせる遺跡が、パンダンチェである(Kaulicke 1975)。この遺跡の発掘では、形成期前期からカハマルカ期までの長い利用の痕跡が認められ、各時期を通じて装飾土器に多様なバリエーションがあることが示された。なかでも特筆すべきは、形成期後期にはパコパンパ遺跡に匹敵するような巨大な切石を用いた基壇建造物が築かれたことと、ペルーにおける最古の事例の一つである形成期前期の土器が検出されたことである。そのため、この地域の形成期前期の時期名称にはパンダンチェが冠せられているが、建築特徴の詳細は不明である。

これら以外で調査がおこなわれた形成期の遺跡としては、パコパンパ遺跡とパンダンチェ遺跡の中間に位置する小規模神殿遺跡マチャイプンゴ(Rosas 1974: 576)や、パコパンパ遺跡からやや北に離れ、埋葬が検出されたアグア・ブランカ遺跡がある(Shady 1983: 21–22)。いずれも小規模な発掘がおこなわれただけであるため、遺跡の特性などについてはわからないことが多い。

また、今回の調査対象地域からは外れるものの、パコパンパ遺跡の西方、行政的にはラ・グランハ村に属するエル・ローヨ遺跡では、切石を用いた基壇建造物と、金製品やウミギクガイ製品が副葬された墓などが確認されている(Wester et al. 2000: 124–151)。この遺跡は、形成期後期に活動の最盛期を迎えるが、その建造物や出土遺物はパコパンパ遺跡と類似している。興味深いことに、エル・ローヨ遺跡が立地するのは、貫入岩地域(D1)の銅鉱山地帯である。これらのことは、パコパンパでも指摘されたように、エル・ローヨと銅製錬との関係を示唆するものである。

これらの調査のほかに、チョターノ川流域では遺跡踏査もおこなわれてきた。こうした踏査もサン・マルコス大学の研究者によって実施され(Santillana 1975; Morales 1998)、筆者らがおこなった遺跡分布調査よりも広域が対象となっていた。しかし、踏査した遺跡の特徴や時空間的位置づけ、地表面採集遺物の詳細などは報告されておらず、遺跡の分布状況を示した図面も存在しない。そのため、筆者らの分布調査で確認した遺跡と、それ以前に調査された遺跡との関係は、ごくわずかな遺跡を除いて不明瞭である。

このような状況のなかでも、先行する遺跡踏査において注目すべき点が多い。まずあげられるのは、遺跡分布と生態環境との関係である。調査者の間で若干の差異はあるものの、各調査者が高度に応じて、生態環境をプラヤ（海拔 1,000～1,200 m）、ケチュアまたはテンプレ（海拔 1,200～2,200 m）、ハルカ（海拔 2,200～2,900 m⁸⁾）に分類している。これらの分類は既述のプルガル・ビダルの分類と基本的には同じであり、それぞれユンガ、ケチュア、スニに対応する。そして、モラーレスは、これらの分類と遺跡分布状況を照らしあわせて、プラヤには 3 遺跡、テンプレには三つの神殿遺跡を含む 21 遺跡、ハルカには 16 遺跡が存在することを指摘した（Morales 1998: 115）。なお、カハマルカ期については、主としてカハマルカ晩期、あるいはカハマルカ中期～後期の活動がみられるという指摘もある（Morales 1998: 116）。また、モラーレスは、形成期に関して、テンプレに 10 遺跡、ハルカに 3 遺跡が確認される一方で、プラヤには遺跡が確認されないとし、ここから遺跡分布と農耕を基盤とした環境利用との関係を示唆した（Morales 1998: 116–119）。しかし、調査範囲内には海拔 1,000～1,200 m の土地がほとんど存在しないため、こうした地形的条件もプラヤで遺跡が確認されない原因の一つであると考えられる。

さらに、当該地域では基本的に川の水が利用されず、より海拔の高い場所にある水源の水が利用される。そこから、サンティアーナは、遺跡の分布が、農耕と深く関わる水路を介した水の分配とも関連しており、バコバンバ遺跡は宗教面だけでなく、水利においても中心的役割をはたしたと論じた（Santiälla 1975: 156）。そして、サンティアーナのデータをもとに、カウリケは、この地域にはバコバンバ遺跡からの距離に応じて二つの集団が存在した可能性を示した（Kaulicke 1975: 56–57）。

また、モラーレスは、これらの議論を発展させ、遺跡分布を生態環境への適応と考えた。そして、遺跡の規模や形態、バコバンバ遺跡からの距離などを考慮して、バコバンバ遺跡を中心としたチョターノ川流域のセトルメント・パターンについて論じた（Morales 1998: 116–120）。これによれば、遺跡の分布は、生態環境を鑑みたくえで構成されており、各環境帯の資源を最大限に利用できるように配置されていたという。こうした遺跡間の階層構造と周辺遺跡の立地を管理するような社会が、形成期から存在していたと考えるにはデータが不十分であり、検証の余地も多い。しかしながら、複数の生態環境を同時に管理することで飢饉といったリスクを分散し、より多量の作物を獲得できることや、農耕に適した土地に遺跡が集中すること、海拔が低い場所ではあまり雨が降らないために乾燥しており、遺跡数が少ないという指摘は、おさえておく必要があるだろう。

このように先行研究では、遺跡分布と生態環境との関わりが盛んに指摘されてきた。しかし、既述のように当該地域の生態環境は、ペルーの一般的な環境区分とはやや異なるため、地域独自のミクロな環境区分を考察する必要がある。また、先行研究は、パコパンパ遺跡を中心とした遺跡間の関係性を念頭に、地域社会の全体像をとらえようとした点で評価できるが、各論考においてはセトルメント・パターンの通時的変化が全く考慮されていない。さらに、各遺跡の機能は、主としてパコパンパ遺跡からの距離によって想定され、それぞれの遺跡はパコパンパを中心とした階層構造のなかに組み込まれている。つまり、各遺跡の主体性が全く考慮されていない点に大きな問題がある。それに加えて、当該地域を一つの閉じた系としてとらえており、チョターノ川流域の社会過程における周辺地域社会との地域間交流は考慮していない。ある社会の動態は、地形、生態環境、地質学的状況、地域間交流といった特定の要因ではなく、複数の要因から同時に論じられるべきものであり、本稿ではこのスタンスを通じて、チョターノ川流域社会の通時的変化を考察する。

上記以外の先行研究としてあげられるものに、インカ道⁹⁾を踏査し、関連遺跡を記録する目的で実施されたカパック・ニャン¹⁰⁾のプロジェクトがある。このプロジェクトによって、南北へと延びるインカ道は調査地を貫くように走り、ちょうどパコパンパ遺跡付近を通ることが明らかにされている (Espinosa 2002: 61–62)。

なお、本研究対象地域からチョターノ川流域を上流に遡ったネグロパンパやチュルカンチャでは、カハマルカ期のチュルパとよばれる石造墳墓 (Shady and Rosas 1976) の報告例もある。これらは、カハマルカ期の調査がおこなわれた数少ない事例である。

これまでみてきたように、チョターノ川流域の考古学調査は、パコパンパ遺跡を中心とする地域でおこなわれてきたというのが実状である。また、先行調査が実施されてきた遺跡は、いずれも単なる居住遺跡ではなく、その規模に差異はあるものの神殿や墓地とされる遺跡である。さらに、調査対象時期は基本的に形成期であり、チョターノ川流域でカハマルカ期の遺跡が集中的に調査された事例はほぼ皆無である。

以上のように、チョターノ川流域という地域的枠組みにおける考古学的状況は、いまだ不明な点が多い。これをふまえて、チョターノ川流域の調査・研究により厚みをもたせるため、本研究では、チョターノ川流域のなかでも調査の蓄積が多く、編年体系が明確なパコパンパ遺跡を中心とした比較的狭い地理的範囲を対象に、集中的な遺跡分布調査を実施した。その際、形成期の編年については、パコパンパ遺跡を中心にすえ、カハマルカ期の編年については、カハマルカ盆地のものをを用いた。

4 チョターノ川流域の遺跡分布調査

本節では、遺跡分布調査の目的と方法を明らかにしたうえで、チョターノ川流域における遺跡分布状況の一般的特徴について示していく。

4.1 遺跡分布調査の目的と方法

パコパンパ遺跡を中心としたチョターノ川下流域西岸を対象とする遺跡分布調査は、2013年の7月中旬から8月末までの計7週間にわたって綿密におこなわれた。本調査範囲は、西側をパルティック川とインゲルヤク川、東側をチョターノ川とワンボヤク川、南側をケブラーダ・ラユランと現代の集落であるビスタ・アレグレの西を流れるケブラーダ、北側をパルティック川とチョターノ川の合流点としている（図2）。この範囲は、サンティアーナが指摘したパコパンパ遺跡を中心とする地域の自然の地理区分とも一致しており（Santillana 1975: 114）、全体が河川および山々の尾根で区切られ、とくに西側部分では河川に向かって急峻な土地が広がる。そのため、先史におけるセトルメント・パターンを考察する際にも有意義な区分であると考えられる。本稿でいうチョターノ川流域とは、とくに注釈や補足がない場合、基本的に上記の範囲をさす。

前節で指摘したように、チョターノ川流域という地域的枠組みにおいては、体系だった先行研究がほとんど存在しない。そのため、分布調査の目的を以下の三つにさだめた。なお、遺跡として認定した際の基準については、後述する。

第一に、各遺跡で地上にみえる構造物の建築特徴や地表面採集可能な遺物、および各遺跡の時空間的位置づけといった基礎データを獲得して、とくに遺跡分布と生態環境との関係を把握することである。第二に、獲得したデータ（建築特徴や採集した土器片）を先行研究と比較検討することを通じて、周辺地域との地域間交流の様相を明らかにし、地域間の関係性とその時期的変遷を把握することである。その際、遺跡分布、地形や生態環境、または住民へのインタビューなどから、隣接地域へ移動するための地域間移動ルートを解明する。そして第三に、遺跡分布調査データを、パコパンパ遺跡の発掘データを中心とした先行研究の成果に組み込み、チョターノ川流域のセトルメント・パターンの通時的变化、ひいては流域社会の形成と変遷を明らかにすることである。

このことから、本研究の意義は、第一に、体系だった遺跡分布調査が存在しない地

域において、考古学的基礎データを獲得、充実する点にある。第二に、遺跡分布調査データを発掘データと統合し、調査地の考古学的状況を複層的に明らかにする点も本研究の特色である。第三に、よりマクロな視点にたてば、チョターノ川流域は、ペルー北部における海岸部、山地、熱帯低地の狭間にあり、地域間交流の一つの中心地であったと考えられる。そのため、本研究成果を通じて、ペルー北部の地域間交流の実態の解明に大きく寄与することができる点も、本研究の重要性といえる。

上記の目的を達成するため、具体的には以下の調査方法をとった。まず、先行研究で登録されている遺跡を踏査するだけでなく、事前に地域住民への遺跡の存在についての聞き取りをおこなった。また、S.A.N. (Servicio Aerofotográfico Nacional: ペルー国立航空写真事業) 刊行の航空写真あるいは衛星写真を用いて地形などからも、遺跡に関する情報を集めた。次に、海拔1,000～3,000 m程度の広がりをもつ調査地域を、谷の底部から山の斜面や頂上部までくまなく歩いて、遺跡を同定した。その際、アンデスで一般的に移動ルートとされる川筋や山の尾根などは重点的に踏査した。

遺跡登録については、主として地表面に遺構や遺物が確認される場合におこなった。しかし、遺構が確認されなくとも、丘陵の頂上部や斜面などの限定された空間内に土器資料が散見される場合には遺跡と同定した¹¹⁾。

その際、遺跡ごとの特徴や遺跡の編年を明らかにするために、地表面で徹底的な考古遺物の採集と建造物の記録を実施した。また、遺物の採集状況、遺構の建築特徴や遺跡全体の形態を簡易測量などによって記録するだけでなく、地理的・生態的特徴(たとえば遺跡の立地と耕作地や現代の道路との関係など)を記した。さらに、遺跡の位置(緯度、経度、海拔)については、GPS (Global Positioning System: 全地球測位システム)を用いて、ペルー国土地理院刊行の1/25,000の地図に記録した。

これらに加えて、地域間移動ルートの問題に取り組むために、踏査中には地形的特徴を詳細に記録したうえで、地域住民に隣接地域へ徒歩や家畜を連れて移動する際の道程や移動時間などに関する聞き取り調査もおこない、チョターノ川流域と周辺地域とを結ぶルートの把握に努めた。

4.2 チョターノ川流域における地域間移動ルート

一般に先史アンデスでは、地域間移動ルートに川筋や尾根を用いたと考えられるが(鶴見 2008b; 山本・伊藤 2013)、そうした状況は現代の徒歩移動においても明確に認められる。ただし、ルートはそれを建設した社会の政治的・経済的要因を反映するため (Topic and Topic 1983; Trombold 1991: 3-8)、古代の移動ルートの想定および同定に

は注意が必要である。また、一つの目的に向かう複数のルートが存在する場合もあるため、広い視野でルートの存在を考慮することも不可欠である。なお、ここでいうルートとは、舗装が施されたフォーマルな道 (road) ではなく、地面を踏み固めただけのインフォーマルな小径 (pass) が中心となる (Trombold 1991)。

アンデスにおけるルート研究の代表としては、インカ道の研究があげられる (Hyslop 1984)。また、ペルー南部やボリビア北部、チリ北部では、ラクダ科動物を伴うキャラバンとその交易および交易ルートと、定住あるいは半定住集落の形成過程の関係が研究されてきた (Núñez and Dillehay 1995)。さらに、ペルー南部山地においては、GIS を用いてラクダ科動物を伴うキャラバンを通じた物資の獲得や消費と地域社会の変化を関連づけて論じる研究もある (Tripcevich 2007)。その一方で、ペルー北部や形成期に関するルート研究は、これまでにほとんどなされてこなかった。しかし、近年では形成期において、GIS を援用した演繹的な研究や (Contreras 2011; 山本 2012; 山本・伊藤 2013)、踏査にもとづく機能的な研究 (鶴見 2008b; 2012) がおこなわれ、複数の地域に存在する神殿間の関係が論じられている。

このような状況のなかで、現在のルート研究の目的とは、単にルートを特定していくことではない。想定されるルートと、そこに連なる社会との間に通時的な相互関係をみだし、整合性のある説明を与えることこそが、ルート研究の目的である (鶴見 2008b; 山本 2012; 山本・伊藤 2013)。

以下、本稿では、上記の問題意識をふまえたうえで、チョターノ川流域と周辺地域を結ぶ地域間移動ルートを明らかにしていく。ルートを想定する際に根拠となるのは、主として地形と生態環境である。また、地域住民へのインタビューをおこなうことで、地形と生態環境から想定されたルートの現在および数世代前までの使用可能性と、どの地域との地域間交流に際して用いられたのかという利用状況を明らかにすることが可能となる。しかし、このようにして想定されたそれぞれのルートとは、あくまで地域間交流をおこなう場合に通行可能なルートを示しただけのものである。そこで、これらの想定ルートに遺跡分布調査のデータを組み合わせることで、チョターノ川流域における各時期の地域間移動ルートを同定していく。また、地域間移動ルートは、チョターノ川流域のセトルメント・パターン成立の背景を考察する際の一助となるため、各ルートの時期同定およびルートとセトルメント・パターンとの関係については、次節で詳述する。本項では想定された全ての地域間移動ルートを記述することで、次節での議論の礎を築く。

地形や生態環境、地域住民からの隣接地域への移動に関する聞き取りデータを鑑み

ると、調査地域では北方面へのルートが1本、北東方面へのルートが2本、東方面へのルートが1本、南東方面へのルートが1本、南方面へのルートが1本、西方面へのルートが1本存在することが想定された（図2）。

このうちの北へのルートは、チョターノ川とインゲルヤク川との合流点あたりから、チョターノ川沿いをワンカバンバ川流域のプカラ市近郊へすすむものである（以下、北①とする）。

北東へのルートの一つは、チョターノ川からケブラーダ・サンタ・モニカを登ったあとでワンカバンバ川流域へといたる（北東①）。また、もう一つは、チョターノ川からケブラーダ・サント・ドミンゴを登り、サント・ドミンゴ・デ・ラ・カピーリヤ市を通過してワンカバンバ川流域へとぬけるものである（北東②）。それぞれ、ワンカバンバ川流域では、チプレ集落近郊に到達する。

東へのルートは、チョターノ川からクテルボ市へとすすむものである（東①）。このルートはその後で、北東にすすめば北部熱帯低地のハエン市やバグア市へ到達し、南東へ向かえばチョータ市へといたる。

南東へのルートは、ワンボヤク川をさかのぼって、ワンボス市へとすすむものである（南東①）。このルートは、東にすすめば、先述の東ルートから南東に向かうルートと合流し、チョータ市へと向かい、西にすすめば、海岸のチクラヨ市と山地のチョータ市およびカハマルカ市を結ぶ幹線道路と合流する。

南へのルートは、ケロコト市のあたりから山の斜面を横切るように、ケブラーダを越えながらすすむものである（南①）。このルートは、現代の道路にほど近い経路をとり、最終的に南東①ルートの延長上にある海岸のチクラヨ市と山地のチョータ市を結ぶ幹線道路と合流する。

西へのルートは、ビスタ・アレグレの集落あたりから、ケブラーダを横切りながら直線的にすすみ、ラ・グランハの集落へといたるものである（西①）。このルートはその後で、山地を南北に移動、あるいはそのまま西の海岸部へ降りていくルートと合流する。

4.3 遺跡分布とその一般的特徴

遺跡分布調査は、パコパンバ遺跡を起点として、その北、東、南、西といった順に実施した。そのため、遺跡の登録番号も、概ねその流れで付与されている。調査の結果、パコパンバ遺跡をふくめて121遺跡を確認した（図3;表2）。そのうち、形成期に属するものは42遺跡、カハマルカ期のものは120遺跡である。

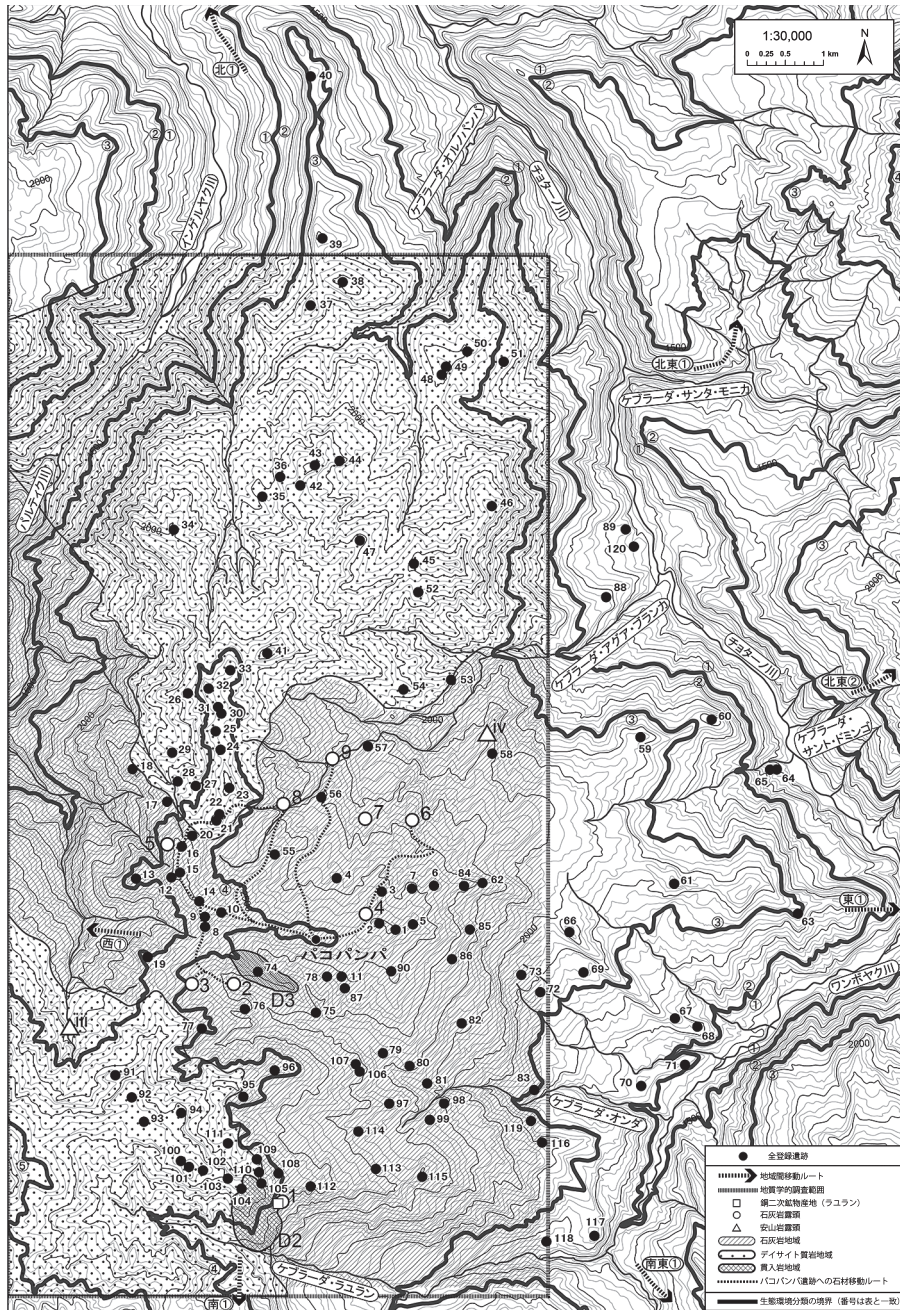


図3 全登録遺跡の分布状況と生態学的・地質学的特徴

表2 遺跡分布調査登録遺跡一覧

遺跡番号	遺跡名	海拔	生態環境	活動が確認された時期と建造物の特徴																	
				形成期前期 ハンタンチエ期	形成期中期 ハコバンハI期	形成期後期 ハコバンハII期	詳細不明	早期	カハマルカ期			末期									
1	バコバンバ ミラドール	2,528 m	④	◎																	
2	カビエリヤ	2,506 m	④	◎																	
3	サン・ペドロ 1	2,502 m	④	◎																	
4	サン・ペドロ 2	2,449 m	③																		
5	サン・ペドロ 3	2,412 m	③																		
6	ロマ・デ・エル・レホ 1	2,472 m	③		●																●
7	ロマ・デ・エル・レホ 2	2,381 m	③																		
8	カチエン 1	2,411 m	③																		
9	カチエン 2	2,575 m	④																		
10	カチエン 3	2,580 m	④																		
11	コチエ・コラル 1	2,594 m	④																		
12	ロマ・デ・カチエン 1	2,389 m	③																		
13	ラ・フライラ・デ・ローヨ 1	2,510 m	④																		
14	ロマ・デ・カチエン	2,532 m	④																		
15	ロマ・デ・カチエン 3	2,599 m	④																		
16	ロマ・デ・カチエン 4	2,624 m	④																		
17	マライバンバ・アルト 1	2,615 m	④																		
18	セロ・ガビラン	2,497 m	③																		
19	ピスタ・アレグレ 1	2,403 m	③																		
20	オリテラ	2,508 m	④																		
21	ミラドール・デ・ラ・バルマ	2,584 m	④																		
22	ラ・バルマ 1	2,612 m	④																		
23	ラ・バルマ 2	2,605 m	④																		
24	アグア・プランカ 1	2,613 m	④																		
25	アグア・プランカ 2	2,582 m	④																		
26	ワカ・デ・ラス・バルマス	2,571 m	④																		
28	マライバンバ・アルト 2	2,484 m	③																		
29	マライバンバ・アルト 3	2,476 m	③																		
30	マライバンバ・アルト 4	2,437 m	③																		
31	アグア・プランカ 3	2,370 m	④																		
32	アグア・プランカ 4	2,565 m	④																		
33	アグア・プランカ 5	2,571 m	④																		
34	サン・バプロ	2,586 m	④																		
35	ラス・バルマス	2,302 m	③																		
36	ヤタキーナ 1	2,128 m	③																		
37	ヤタキーナ 2	2,151 m	③																		
38	クルス・チキータ	2,151 m	③																		
39	チヨケ 1	2,019 m	③																		
40	チヨケ 2	2,008 m	③																		
41	セロ・グランデ	1,871 m	③																		
41	プエブロ・ピエッホ	2,515 m	④																		

表 2 遺跡分布調査登録遺跡一覧

遺跡番号	遺跡名	海拔	生態環境	活動が確認された時期と建造物の特徴																
				形成前前期 バンダンチエ期	形成前中期 パコバンバI期	形成前後期 パコバンバII期		詳細不明	カハマルカ期			末期								
						早期	中期		後期	前期	中期		後期							
42	ヤタキーナ 3	2,203 m	③																	
43	ヤタキーナ 4	2,215 m	③																	
44	オルノバンバ 1	2,135 m	③																	
45	バヤクル 1	2,223 m	③																	
46	バヤクル 2	2,200 m	③																	
47	オルノバンバ 2	2,211 m	③																	
48	リマバンバ 1	1,863 m	③																	
49	リマバンバ 2	1,908 m	③																	
50	リマバンバ 3	1,893 m	③																	
51	フライロン	1,774 m	②																	
52	バヤクル 3	2,165 m	③																	
53	アグア・フランカ 6	2,051 m	③		◎															
54	アグア・フランカ 7	2,146 m	③		◎															
55	ラ・バルマ 3	2,467 m	③																	
56	トゥカック・アルト 1	2,323 m	③																	
57	トゥカック・アルト 2	2,185 m	③																	
58	トゥカック・バホ	2,123 m	③																	
59	ロマ・ロシュージャ	1,947 m	③																	
60	ウニヤ・デ・ガト	1,825 m	③																	
61	カンボ	2,005 m	③																	
62	エル・レホ 1	2,269 m	③																	
63	ミラドール・デ・カンボ	1,841 m	③		◎															
64	ワングアカラ 1	1,323 m	①																	
65	ワングアカラ 2	1,358 m	①																	
66	ラ・コンガ	2,033 m	③																	
67	ミラドール・デ・シグス 1	1,677 m	②																	
68	ミラドール・デ・シグス 2	1,658 m	②																	
69	モジェ	1,856 m	③																	
70	ワカ・デ・ナランホ 1	1,572 m	②																	
71	ワカ・デ・ナランホ 2	1,547 m	②																	
72	マチャイブゴ 1	1,881 m	③																	
73	マチャイブゴ 2	1,950 m	③																	
74	ラス・アチーラス	2,425 m	③																	
75	スチユラン 1	2,319 m	③																	
76	スチユラン 2	2,435 m	③																	
77	メアデーロ	2,529 m	④																	
78	コチエ・コラル 2	2,381 m	③																	
79	スチユラン 3	2,243 m	③																	
80	セロ・ガヒラン・デ・マルコバンバ	2,241 m	③																	
81	ラス・クルセス	2,164 m	③																	
82	マルコバンバ・アルト	2,135 m	③																	
83	バンダンチエ	1,881 m	③		◎※															

表2 遺跡分布調査登録遺跡一覧

遺跡番号	遺跡名	海拔	生態環境	活動が確認された時期と建造物の特徴														
				形成期前期 ハンタンチエ期	形成期中期 ハコハンハI期	形成期後期 ハコハンハII期	詳細不明	早期	カハマルカ期			後期	末期					
84	エル・レホ 2	2,324 m	③					●										
85	カラクック	2,254 m	③					●										
86	パワロ	2,275 m	③					●										
87	コチエ・コラル 3	2,378 m	③					◎										
88	ワランガユック 1	1,437 m	①					◎										
89	ワランガユック 2	1,293 m	①					◎										
90	ハコハンバ 2	2,404 m	③					◎										
91	ペニヤ・ブランカ	2,507 m	④					◎										
92	トトーラ 1	2,784 m	④					◎										
93	サンパアロ・デ・ケロコト	2,846 m	⑤					◎										
94	トトーラ 2	2,736 m	④														●	●
95	スーロ	2,587 m	④														●	●
96	ラ・ターヤ	2,554 m	④														●	●
97	グアヤンハンバ 1	2,269 m	③					●										
98	シヤンキウ 1	2,127 m	③					●										
99	グアヤンハンバ 2	2,185 m	③					◎										
100	アルフォンブリージャ 1	2,724 m	④															
101	アルフォンブリージャ 2	2,769 m	④															
102	アルフォンブリージャ 3	2,746 m	④															●
103	ロマ・デ・ケロコト 1	2,707 m	④															
104	ロマ・デ・ケロコト 2	2,694 m	④															●
105	ルケマ	2,604 m	④															●
106	ワングハンバ 1	2,316 m	③					●										
107	ワングハンバ 2	2,316 m	③															
108	ロマ・デ・ケロコト 3	2,494 m	③															
109	ロマ・デ・ケロコト 4	2,557 m	④															
110	ワカ・デ・ケロコト	2,601 m	④															
111	ロブレ	2,588 m	④															
112	ロマ・デ・ケロコト 5	2,476 m	③					●										
113	エルミータ	2,301 m	③															
114	グアヤンハンバ 3	2,247 m	③					◎										
115	ペロール	2,305 m	③															
116	シヤンキウ 2	1,929 m	③															
117	セロ・ハンバグランデ	1,760 m	②					◎										
118	ハンバグランデ	1,682 m	②															
119	テンブレ	1,865 m	③					●										
120	ワランガユック 3	1,237 m	①					◎										

●本分布調査による時期決定 ◎ = 神殿あるいは単なる居住区ではないと考えられる遺跡 (巨石建造物は灰色で色かけ) ※ = 先行研究による時期決定

先行研究による踏査で記録されていた遺跡については、わからない点が多い。サンティアーナによる踏査によれば、今回のわれわれの分布調査範囲内には36遺跡が存在していると考えられる(Santiälla 2005: 188-189)。しかしながら、先述のように、遺跡の正確な分布図はなく、遺跡名と遺跡が位置する集落名および海拔が示されているだけである。そのため、パコバンバ遺跡やパンダンチェ遺跡といったような、現地の人々にその名が知られている遺跡以外は、正確な特定は不可能に近い。さらに、先行調査で記録された海拔に関しても、使用機材の関係もあり、本分布調査の記録と比べると、大きく異なっている場合がある。このようなことをふまえると、確実に同定可能な遺跡は8遺跡しかなく、本調査結果と先行研究との照合は困難である。

以下、本項では、遺跡分布の一般的な特徴を記述していく。なお、時期ごとのセトルメント・パターンについては次節で細密に検討する。

基本的に、遺跡はなだらかな起伏や丘、あるいは尾根上の周囲より一段高いところに立地している。また、遺跡の大半は、ケブラーダ・アグア・ブランカとケブラーダ・ラユランに挟まれた調査地域の南東側にある。この分布の傾向は、とくに形成期の遺跡に顕著である。さらに、遺跡分布が集中する地域は、現在においてアグア・ブランカ集落、パコバンバ村、ケロコト市が位置する人口が集まる場所でもある。

ここで遺跡分布と海拔、つまりは前述のミクロな生態環境との関係のみてみたい。全体的には、有刺植物地帯-熱帯丘陵帯に属する遺跡が5遺跡、乾燥森林地帯-熱帯丘陵帯が7遺跡、乾燥森林地帯-熱帯低山帯が70遺跡、湿潤森林地帯-熱帯低山帯が38遺跡、湿潤森林地帯-熱帯山地が1遺跡となっている。ここからは、乾燥森林地帯-熱帯低山帯と湿潤森林地帯-熱帯低山帯に、大半の遺跡が存在していることが明らかである。

先述の通り、乾燥森林地帯-熱帯低山帯と湿潤森林地帯-熱帯低山帯は、気温もやや温暖で降水量もある。そのため、トウモロコシ、マメ類、ムギ類などといった様々な作物を栽培することができるほか、より海拔の高い場所では家畜飼養や木材利用なども可能な環境である。こうした豊かな植生は、生業活動の際に非常に有益であり、現在でも集落の大半はこれらの二つの生態環境にある。また、これらの生態環境で生活を営む際のもう一つの利点は、高度的に中間地点にあることを活かして、その上下に存在する環境帯へのアクセスが容易なことである。これは、現代の人々の生活からも支持される。つまり、チョターノ川流域にある全ての生態環境を一日以内で徒歩移動できるため、上記二つの生態環境では、必要に応じてキャッサバや果物に適したより温暖な生態環境から、より寒冷で牧草の繁茂する生態環境までを、効率的に利用で

きるのである。

ただし、遺跡分布調査範囲のうち、とくに南東側に遺跡が集中していることを考慮すると、生態環境以外の要因も、遺跡分布に影響していたと考えられる。ここで、調査範囲の地形をみると、いくつかの特徴がみてとれる。まず、西側のバルティック川やインゲルヤク川へ下る斜面は急峻である一方で、東側のチョターノ川やワンボヤク川へと下りる斜面は、それよりもなだらかである。また、東側斜面には大きな特性があり、一般的に北から南に向かうにつれて谷の幅が広がる。より具体的には、調査地の北から南にすすむと、ケブラーダ・アグア・ブランカあたりで谷の幅が広がりはじめ、それがパコパンパ村付近で最大幅になったあと、ケロコト市をすぎると再び急激に谷幅が狭くなるのである。さらに、ケロコト市の東側の斜面を下って、ワンボヤク川へと至る地点は急斜面となっているため、ケロコト市のあたりからワンボヤク川へと下りていくためには、やや南に迂回してワンボヤク川とケブラーダ・ラユランとの合流点の方へとすすんでいく必要がある。これらの地形的特徴をまとめると、遺跡が集中的に分布する地域は、調査範囲内で最も谷幅がひろく、かつ斜面が緩やかな土地であるといえる。このことは、居住あるいは生業活動をおこなうために適した場所が、遺跡立地に際して選択されたことを示唆する。これを肯定するように、土地が狭く、斜面も急な調査地域の北側のケロコティージョ市からケブラーダ・オルノパンパあたりまでは、斜面に遺跡はほとんど確認されていない。

以上のことから、チョターノ川流域の遺跡分布には、地形的特徴および生態環境が十分に考慮されていたことが明白である。また、パコパンパ遺跡周辺には、建材に用いられた石灰岩の露頭や遺跡で用いられた石製品の産地も存在する。さらに、調査地の少し西側のセロ・ネグロから北へ流れるケブラーダ沿いでは、パコパンパ遺跡で石器に用いられている安山岩を採取することもできる。そのため、チョターノ川流域、とくに遺跡分布が集中するような場所は、人間が生活を営むうえで、理想的な立地にあるといえる。

5 チョターノ川流域のセトルメント・パターン

本節では、遺跡間の関係性や、セトルメントとそれをとりまく環境および地域間交流との関連などといった新たな知見にもとづいて、チョターノ川流域におけるセトルメント・パターンとその変遷について論じる。そして、遺跡分布調査のデータにパコパンパ遺跡の発掘調査成果を総合する。これをふまえて、時期ごとの特徴や各遺跡の

特性を詳細に検討しつつ、チョターノ川流域における形成期の通時的な社会変化、およびその背景を包括的に議論していく。また、チョターノ川流域社会における形成期の特徴をより明確にするため、同流域社会のカハマルカ期の状況を整理し、それと比較する。最後に、すでに分布調査が実施されているワンカバンバ川流域とカハマルカ盆地の形成期の展開との比較を通じて、チョターノ川流域社会の特徴を明らかにしていく。

5.1 形成期のセトルメント・パターンとその特徴

形成期に関しては、パコパンバ遺跡の発掘調査の成果によって、精緻な建築および土器編年が確立されつつある。そのため、遺跡分布調査時に地表面採集した土器の分析をおこなうことで、時期ごとのより細やかな議論が可能となる。しかし、通時的な考察に先立ち、本項ではまず、形成期の全体的な傾向をおさえておく。

形成期の遺跡は、総計で42遺跡が確認されている。その分布は谷幅が広く、斜面の傾斜も緩やかな調査地の南東部、とくにパコパンバ遺跡を中心とする地域に集中している（図4）。こうした全体的な遺跡分布と生態環境との関係をみてみると、内容は以下の通りとなる。有刺植物地帯－熱帯丘陵帯に属する遺跡が3遺跡、乾燥森林地帯－熱帯丘陵帯が1遺跡、乾燥森林地帯－熱帯低山帯が31遺跡、湿潤森林地帯－熱帯低山帯が6遺跡、湿潤森林地帯－熱帯山地が1遺跡である。つまり、チョターノ川流域に存在する全生態環境の利用が認められるものの、セトルメントは、乾燥森林地帯－熱帯低山帯に集中しているのである。先述の通り、乾燥森林地帯－熱帯低山帯の最大の特徴は、その上下に存在する環境帯へのアクセスが容易で、必要に応じて多様な生態環境を効率的に利用できることである。また、パコパンバ遺跡の周辺では、石灰岩や安山岩などといった資源を入手できる環境もそろっている。さらに、パコパンバ遺跡の発掘調査からは、パコパンバがチョターノ川流域の社会的統合に際して、重要な役割をはたし、ペルー北部にある他の神殿社会と活発な地域間交流をおこなっていたとされる。このようなことから、全体的傾向として、パコパンバを中心とした範囲に、セトルメントが形成されたと考えられる。ただし、セトルメント・パターン成立の背景を論じるためには、時間軸を考慮した、より詳細な考察が必要なことは明白である。したがって、以下では、時期ごとに遺跡分布と、地形、生態環境、遺跡間関係、および地域間移動ルートとの関係をみていくことで、チョターノ川流域のセトルメント・パターン成立の背景とその特徴を論じる。

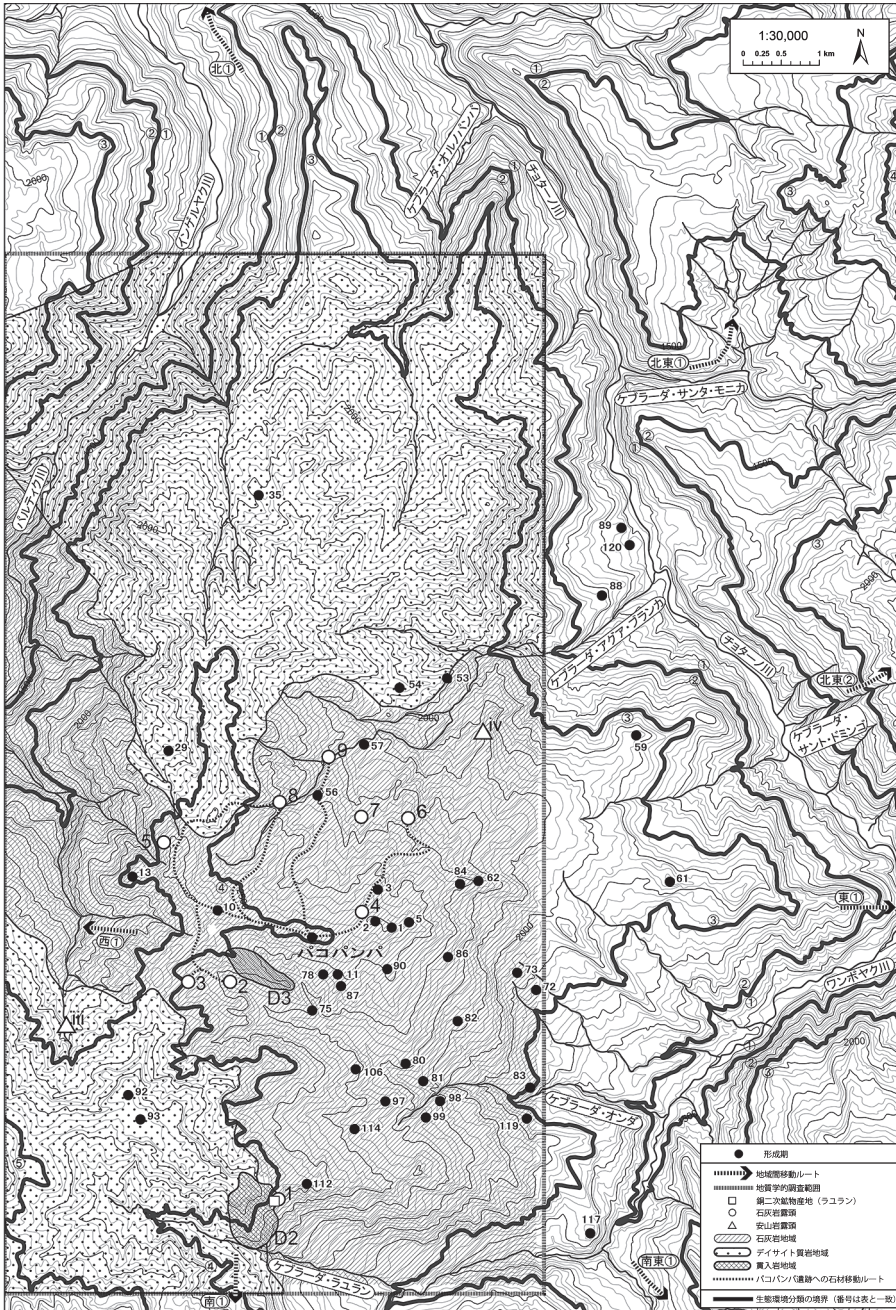


図4 形成期に属する遺跡の分布状況と生態学的・地質学的特徴

5.1.1 パンダンチェ期 (図5)

形成期前期に相当するパンダンチェ期の活動が認められるのは、パンダンチェ、グアヤンパンパ3、そしてパコパンパの3遺跡だけである。全ての遺跡がチョターノ川流域のなかでも谷幅が最も広く、斜面が緩やかな場所に位置している。これらのうち、パンダンチェとグアヤンパンパ3は乾燥森林地帯-熱帯低山帯に、パコパンパは湿潤森林地帯-熱帯低山帯にある。いずれも居住や生業、あるいは斜面の上下動による多様な生態環境を利用するために利便性の高い場所である。両者の差異は、パンダンチェやグアヤンパンパ3の方がパコパンパよりも海拔が低いため、より温暖な条件下で獲得可能な作物や河川へのアクセスが、わずかに容易なことだけである。

パンダンチェ期は、土器を有する最古の時期である。そのため、対応する包含層が遺跡の下層に存在し、新しい時期の堆積に覆われている可能性もある。こうした条件もこの時期の遺跡が確認されにくい要因であると考えられる。しかし、このような状況下においても、既述の3遺跡でパンダンチェ期の活動が確認されていることには、どのような意味があるのだろうか。ここで、3遺跡の分布と地形との関係を鑑みると、一つの興味深い点が見えてくる。それは、3遺跡のうち、とくにパンダンチェとグアヤンパンパ3が、ワンボヤク川に注ぎ込むケブラダ・オンダ付近に位置していることである。さらに、パコパンパも既述の2遺跡ほど近接してはいないが、ケブラダ・オンダから斜面をのぼった場所にある。また、パコパンパからは、北東のケブラダ・アグア・ブランカの方向へ下っていくこともできる。先述のように、たしかに3遺跡ともに、人々の生活に利便性の高い場所には立地しているが、単純に広い耕作地や高度差に由来する多様な生態環境を利用することを目的とするのであれば、より谷幅が広い場所や、建材に用いる石材の産地に近い場所に遺跡が集中してもよさそうである。

この意味において、パコパンパはまさに最適な場所に立地しているといえるが、パンダンチェとグアヤンパンパ3の立地は、これだけでは説明できない。それに加えて、ケブラダ・オンダは、現在では乾季にはほとんど水がなくなる。つまり、現状からは、その水を居住や生業に潤沢に用いることは不可能であるといえる。ちなみに現在、パンダンチェやグアヤンパンパ3の周囲に住む人々は、より高地から斜面を下って流れてくる水路を利用している。

これらの遺跡分布は、パンダンチェ期のセトルメント・パターンをとらえるためには、地形や生態環境、地質の特徴だけではなく、その他の背景も多角的に検討する必要があることを示している。これをうけて、まず考慮しなければならないのは、各遺

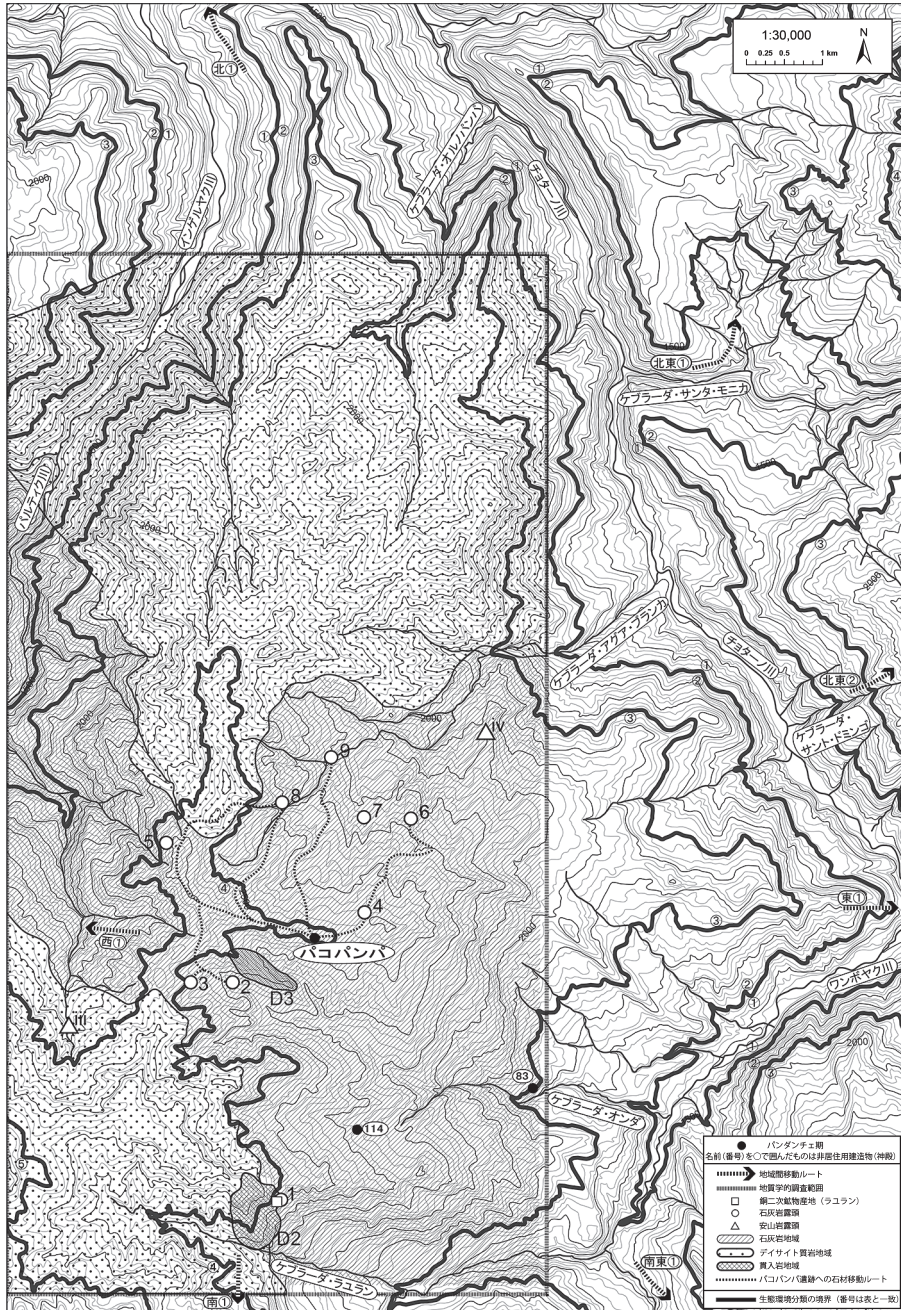


図5 パンダンチェ期の遺跡の分布状況と生態学的・地質学的特徴

跡の特性であろう。

これまで、アンデスでは、セトルメント・パターン研究における遺跡の年代決定の指標として、地表面採集土器に加えて、建築特徴がしばしば利用されてきた (ex. Billman 1996)。とくに、形成期の神殿に関しては、各地に点在する神殿の形態比較によって (Williams 1985; 1988), 後代の建造物と区別可能な建築特徴が明らかにされてきた。その後、建造物をメディアとしてとらえる一連の研究をうけて (加藤 1993; Moore 1996; 2005), 神殿の形態をめぐる研究はさらに進展をみせた。そして、これらの研究成果をふまえることで、形成期の遺跡を建築特徴から分類し、各遺跡の特性をより明らかにすることができるようになってきた。実際に筆者は、同様の手法を用いて、チョターノ川流域の北に位置するワンカバンバ川流域で、各遺跡の特性を明らかにすることにつとめてきた (山本 2012; 2014)。具体的な方法としては、「基壇¹²⁾」, 「広場¹³⁾」, 「テラス¹⁴⁾」といった神殿建築の構成要素とそれらの複合配置を対象に、各遺跡を分類することが必要である。しかし、チョターノ川流域の遺跡分布データに関しては、地表面に繁茂する草木の影響や、ほとんど全ての遺跡が耕作地として現在利用されていることもあり、その形態や規模を正確に把握することは非常に困難である。したがって、最低限かつ便宜的な分類にはなるが、各遺跡を視認可能な範囲で居住用と非居住用とに区分した。ここでいう非居住用とは主として神殿を想定しているが、先行調査で埋葬がみつかったために墓地とされたような遺跡や小規模な基壇建造物もここにふくめる。また、地表面で形成期の大神殿に特徴的な大型の切石が認識される場合は、その旨を表2に記している。

上記の分類は、あくまで地表面で視認できる建造物が対象であるため、各遺跡の下層にあるバンドンチェ期については、詳細は不明瞭である。また、発掘調査がおこなわれたパコパンパやバンドンチェでも、バンドンチェ期の大規模建造物は、現在までに確認されていない。そのため、あくまで仮説的な見解ではあるが、本分析ではこの後の時期に神殿として用いられるという各遺跡の特殊性も考慮して、既述の3遺跡をいずれも非居住用の遺跡と分類した。残念ながら、これ以上の建築データはないため、これらの3遺跡間の関係性をつかむことはできない。

ただし、地表面採集と発掘調査で確認された3遺跡の土器をみると、北部熱帯低地のバグア (Shady 1973; 1987) や北部山地のカハマルカ (Terada and Onuki 1982; 1985; 1988) の土器との高い類似性が認められた。さらに、遺跡分布調査時に実施した地域住民へのインタビューによれば、チョターノ川流域の川筋や尾根は、周辺地域への徒歩移動ルートとして現在においても利用されている。このことから、次に調査範囲内

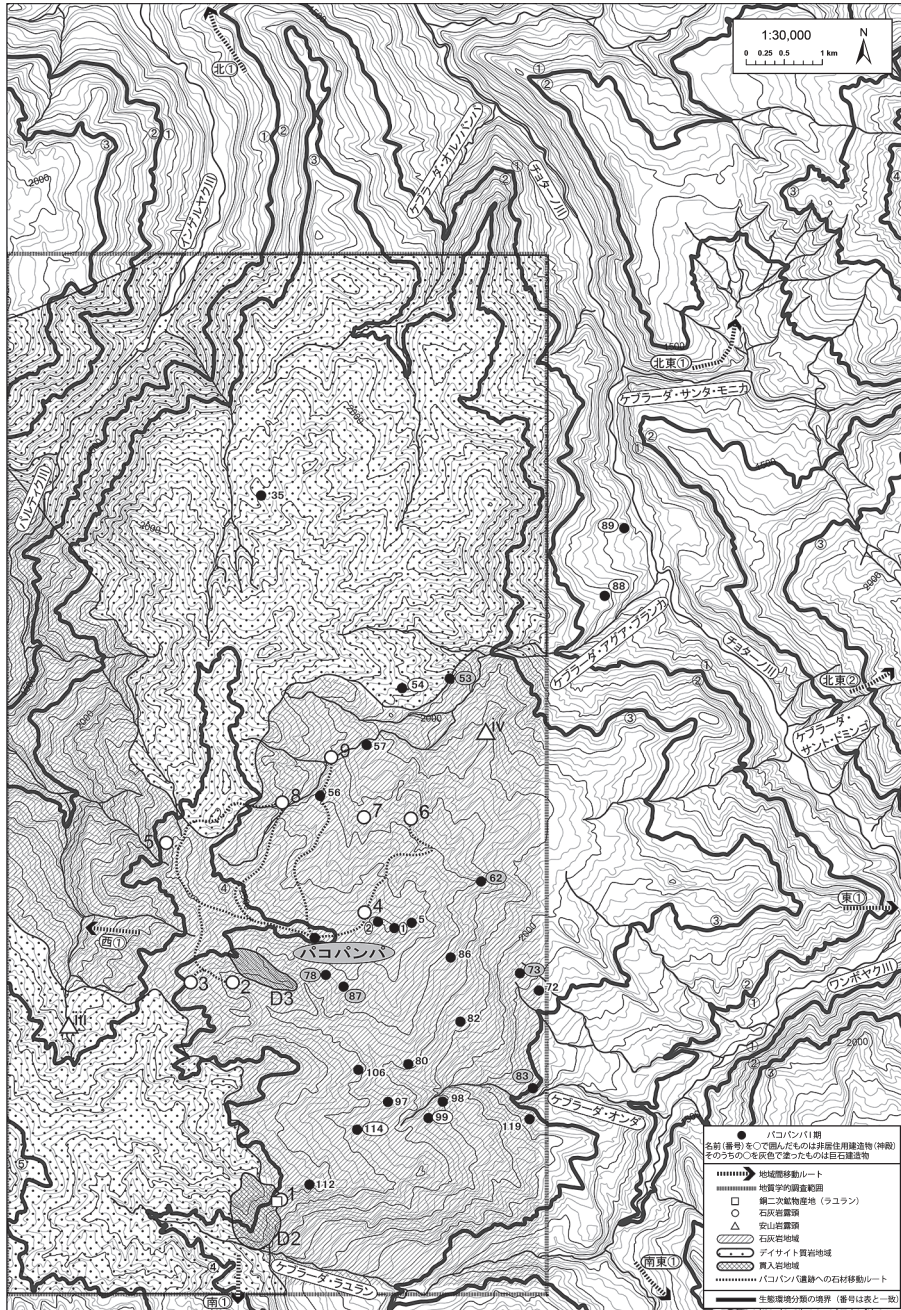


図6 バコパンパ1期の遺跡の分布状況と生態学的・地質学的特徴

だけの問題としてだけではなく、その地域外との関係、つまりは地域間交流という視点から、チョターノ川流域のセトルメント・パターンについて考察してみたい。

パンダンチェ期のセトルメント・パターンと地域間移動ルートとの関係をみてみると、パンダンチェ、グアヤンパンパ3とパコパンパは、いずれも東①、南東①のルートにアクセスしやすい場所に立地している。また、極めて重要なのは、これらのルートが北部熱帯低地のバグアと北部山地のカハマルカ方面へのルートということである。なぜなら、先述したように、土器からも、チョターノ川流域と北部熱帯低地と北部山地との地域間交流が示唆されるためである。地域間交流は、周囲に存在する各地域社会を一様に結ぶものではなく、個々の地域社会がそれぞれの目的や背景に応じて選択的かつ主体的に決定するものである。そのため、パンダンチェ期の人々が、周辺地域のなかでも、とくにバグアとカハマルカとの地域間交流を重視し、その際に東①と南東①のルートが用いられたことが想起される。

このようにしてみると、パンダンチェ期のセトルメント・パターンとは、周囲の地形、多様な生態環境、地質学的特徴だけでなく、地域間交流を重視した結果として成立したものであると考えられる。

5.1.2 パコパンパI期 (図6)

パコパンパ期Iには、パンダンチェ期にみられた状況に変化があらわれ、調査地域の遺跡数が27遺跡にまで増加する。パンダンチェ期から活動がみられた3遺跡は、引き続き利用された。

この時期のチョターノ川流域の全体的な遺跡分布には明確な傾向があり、ヤタキーナ1遺跡を除く全ての遺跡が、ケブラーダ・アグア・ブランカとケブラーダ・オンダ付近、あるいは両ケブラーダに挟まれた場所に立地する。そのなかでもとくに、パコパンパ遺跡の周囲とケブラーダ・アグア・ブランカの周りにはセトルメントの集中がみられる。これらは、いずれも谷幅が広く、緩やかな斜面が続く場所であり、最も多くの土地を利用できる場所であるといえる。

また、パコパンパI期の27遺跡のうち、2遺跡は有刺植物地帯－熱帯丘陵帯に、22遺跡は乾燥森林地帯－熱帯低山帯、残りの3遺跡は湿潤森林地帯－熱帯低山帯に位置する。海拔1,500m以下の土地に遺跡が確認されるようになったことは新規的である。ここからは、果物やマニオクをはじめとした、より暖かい土地に適した作物を利用する志向が生じたことも示唆される。分布の中心から外れているヤタキーナ1遺跡が利用されるようになった背景には、こうした要因があった可能性もある。なぜな

らば、現在、ヤタキーナ1遺跡の周辺では、その高い海拔にも関わらず、より調査地域内の南側の地域と比べて多量の果物が栽培されているからである。しかし、重要なことは、パコパンパI期でセトルメントの中心となっているのは、乾燥森林地帯－熱帯低山帯であり、先行するパンダンチェ期との間に差がないことである。また、乾燥森林地帯－熱帯低山帯から有刺植物地帯－熱帯丘陵帯への移動は容易で、一日以内に徒歩での往復が可能である。これらのことから、パコパンパI期のセトルメントが、全体的に居住や生業あるいは斜面の上下動による多様な生態環境の利用に際して、最も効率の良い場所に集中していることが明らかである。

次に、遺跡の建築的特徴から、各遺跡を視認可能な範囲で、居住用と非居住用とに分類する。有刺植物地帯－熱帯丘陵帯ではワランガユック1とワランガユック2の2遺跡、乾燥森林地帯－熱帯低山帯ではアグア・ブランカ6、アグア・ブランカ7、エル・レホ1、マチャイプンゴ2、コチェ・コラル2、パンダンチェ、コチェ・コラル3、グアヤンパンパ2、グアヤンパンパ3の9遺跡、湿潤森林地帯－熱帯低山帯ではパコパンパ、ミラドール、カピーリヤの3遺跡、総じて14遺跡が非居住的用途（神殿）であったと考えられる。この状況を見ると、パコパンパI期の神殿は、様々な生態環境帯に立地しており、そのなかでもとくに乾燥森林地帯－熱帯低山帯に、最も多くの神殿が存在することが指摘できる。全ての遺跡で発掘調査がおこなわれたわけではないため、詳細については今後検討する余地もあるが、神殿のなかで最大規模を誇るパコパンパ、および同じ尾根上にある一連の遺跡（カピーリヤ、ミラドール）は、湿潤森林地帯－熱帯低山帯にある。

先行研究や現在進行中のパコパンパ遺跡の発掘調査によれば、その建築特徴や規模、出土遺物などから総合的に判断して、パコパンパはチョターノ川流域で社会的統合の中心にあった神殿と考えられる。しかし、その立地は同時期（パコパンパI期）のセトルメント、および神殿の分布が集中する生態環境にはない。つまり、パコパンパ神殿の建設に際しては、多くの人々が生活を営み、多くの神殿が築かれた空間以外が選ばれたということである。

それではここで、パコパンパI期における神殿間の関係を考察してみたい。神殿の分布状況を見ると、中心的役割をはたしたパコパンパをふくめた各神殿は、約1.0～2.5 km程度という比較的近距离に分散している。また、パコパンパ以外の神殿の詳細は不明ではあるが、パコパンパほど突出した規模の神殿遺跡は、これまでに確認されていない。ここからは、それぞれの神殿が、比較的小規模の集団の手で独自に支えられていたことが推測される。

さらに、神殿のなかでも、形成期の大神殿に特徴的な大型の切石が地表面に認識されるものとして、パコパンパ、アグア・ブランカ 6、エル・レホ 1、マチャイプンゴ 2、コチェ・コラル 2、パンダンチェ、コチェ・コラル 3 があげられる。コチェ・コラル 2 とコチェ・コラル 3 は近接し並んでいることから、これらを一連の神殿として想定した場合、大型の切石を用いた神殿も、最大で約 2.5 km 程度しか離れておらず、それぞれが近距離にあったといえる。

また、パコパンパ遺跡で用いられた建材の産地は、図 6 の石灰岩露頭として示された点である。とくに露頭 4 は、パコパンパ I 期から利用され、その後は露頭 6、露頭 9、露頭 8、露頭 3 が利用されたことが推定されている（清水・清水 2010; 清水・清水・中島 2011）。全ての神殿遺跡は、これらの露頭に近い場所、あるいはそれよりも海拔の低い場所に立地している。このことから、とくに大規模な神殿建設に際しては、切石の運搬コストが考慮されていたと考えられる。さらに、安山岩露頭 iv は、パコパンパで出土した水晶やメノウの産地であることも推定されている（清水・清水・中島 2011）。これらに加えて、パコパンパ遺跡がある土地は、尾根が東西（高低）に長く伸びており、尾根上の空間も他の尾根と比べて広大である。そして、先述したように、パコパンパ神殿の建築軸は、星座の運行とも関係している。こうした意味において、パコパンパは、尾根の上下動をふくめて、多様な生態環境や地質学的特徴、景観といった複合的な資源を利用するうえで、最適な場所であったといえることができる。

次に、地表面採集と発掘調査で確認された各遺跡の土器に目をむけると、この時期の土器もパンダンチェ期から引き続いて、北部熱帯低地のバグア（Shady 1973; 1987）や北部山地のカハマルカ（Terada and Onuki 1982; 1985; 1988）の土器との高い類似性を示している。パコパンパ I 期の遺跡、とくに神殿は、周辺地域への徒歩移動ルートのなかでも東①、南東①の各ルートにアクセスしやすい場所にある。

このように、北部熱帯低地や北部山地の諸社会との地域間交流の存在は、土器の共通性からも強く示唆される。そしてここからは、パコパンパ I 期のチョターノ川流域に生じた遺跡数および神殿数の増加という急激な変化が、周辺地域社会との地域間交流を一つの要因として生じたことを推測することができよう。

また、こうした状況のなかで、パコパンパでは、パコパンパ I 期の最後に、神殿の規模や複雑性が増すとともに、階層性の萌芽を示唆するような金製品や北部海岸で特徴的な土器などの副葬品をもつ特殊な墓があらわれる。その背景には、東①と南東①ルートへのアクセスの利便性に加えて、既述の複合的な資源活用における地政学的重要性があったと考えられる。なお、遺跡分布状況からは、北東①と北東②のルートと

の関係も示唆されるが、これらのルートが通過するチョターノ川東岸¹⁵⁾ およびワンカバンバ川との合流域では、形成期の遺跡は確認されていない。つまり、北東①と北東②のルートは、形成期の主要ルートではなかったと考えられるのである。

5.1.3 パコパンパⅡ期 (図7)

パコパンパⅡ期の活動が認められた遺跡は、全部で29遺跡ある。遺跡数だけを見ると、パコパンパⅠ期からわずかに増加しているものの、特段の変化はない。また、そのうちの14遺跡は、パコパンパⅠ期からの連続的な利用がみられる。この時期にはじめて活動が認められたのは半数の15遺跡だけである。

この時期のチョターノ川流域の遺跡分布の全体的な特徴は、パコパンパ遺跡の周囲とケブラーダ・アグア・ブランカの周りに加えて、パコパンパ遺跡から西側へ登った先の分水嶺ともなる尾根筋の周囲にも分布がみられるようになることである。つまり、パコパンパⅠ期までの谷幅が広く、緩やかな斜面が続くような場所だけではなく、チョターノ川流域のなかでも海拔の高い場所も利用されるなど、土地利用の多様性が増したと考えられる。

また、こうした状況に応じて、パコパンパⅡ期のセトルメントは、より多くの生態環境に立地することになった。その内訳をみると、有刺植物地帯－熱帯丘陵帯1遺跡、乾燥森林地帯－熱帯丘陵帯1遺跡、乾燥森林地帯－熱帯低山帯20遺跡、湿潤森林地帯－熱帯低山帯7遺跡、超湿潤森林地帯－熱帯山地1遺跡となっている。つまり、以前と比べて海拔の高い2,500 m以上の場所に立地する遺跡が増加し、より高地の生態環境を利用するようになったことが指摘できるのである。その背景には、トウモロコシに加えて、マメ類やムギ類などを栽培する比重が増したこと、あるいはパコパンパ遺跡でも出土傾向が顕著となる、一般に高地適応とされる荷駄獣のラクダ科動物の飼養が存在した可能性はある。ただし、注意すべきは、多様な生態環境を利用しつつも、セトルメントが集中するのは、あくまで乾燥森林地帯－熱帯低山帯であり、その傾向は先行する二つの時期と大きな差がないことである。先述したように、斜面の上下動をおこなうことで、高度差を活かして多様な生態環境を利用するためには、高地と低地へのアクセスが容易な中間地点にセトルメントを集中させる方が都合がよいであろう。

ここで、建築特徴をふまえて各遺跡の特性とその分布状況についてみると、パコパンパⅡ期には、14の神殿が存在したと考えられる。具体的には、有刺植物地帯－熱帯丘陵帯ではワラングユック3、乾燥森林地帯－熱帯丘陵帯ではセロ・パンパグラン

デ、乾燥森林地帯－熱帯低山帯ではコチェ・コラル 1、アグア・ブランカ 6、アグア・ブランカ 7、マチャイプンゴ 2、パンダンチェ、コチェ・コラル 3、グアヤンパンパ 3 の 7 遺跡、湿潤森林地帯－熱帯低山帯ではパコパンパ、ミラドール、カピーリヤ、トトラ 1 の 4 遺跡、超湿潤森林地帯－熱帯山地ではサンパプロ・デ・ケロコトが、それに該当する。

このうちのコチェ・コラル 1 は、隣接するコチェ・コラル 2 やコチェ・コラル 3 と同時期かつ一連の神殿、つまりは一つの神殿複合であると推測することもでき、そう仮定すれば、パコパンパ I 期から連続して利用されたことになる。しかし、それ以外のトトラ 1、サンパプロ・デ・ケロコト、セロ・パンパグランデ、ワラングユック 3 は、パコパンパ II 期から新たに利用が開始された神殿である。このことは、生業活動に幅が出た結果として、単に多様な生態環境帯へセトルメントが分散しただけでなく、それと同時に各生態環境で生活を営む集団ごとに、神殿が建設されたことを示唆している。

ただし、このような状況においても、最も多くの神殿が存在するのが乾燥森林地帯－熱帯低山帯で、かつ最大規模を誇るパコパンパとその一連の遺跡（カピーリヤ、ミラドール）が、湿潤森林地帯－熱帯低山帯にあることには、変化がみられない。また、神殿のなかでも中心的な役割をもつと考えられる巨石建造物は（コチェ・コラル 1 をパコパンパ I 期から連続したものとしてとらえると）、全てパコパンパ I 期からの継続的な利用が認められている。さらに、神殿間の空間的關係をみてみると、各神殿が最大でも約 3.2 km の距離のなかで分布している。パコパンパ I 期にもあったように、比較的狭い範囲に複数の神殿が建設されていることから、パコパンパ II 期においても、流域内の各地に、それぞれの神殿を支えるような集団が存在していたことが推測される。

しかし、巨石建造物を用いた神殿のなかでも、群を抜いて大規模かつ複雑に配置されたパコパンパ遺跡の発掘調査データは、この時期のパコパンパがリーダーを中心に、パコパンパ I 期に築かれた状況を基礎として、チョターノ川流域において、より中心性を高めたことを示唆する。つまり、パコパンパの社会的位置づけは、チョターノ川流域のなかでも、特殊な存在であったと考えられるのである。これに関しては、パコパンパが、建材となる石灰岩露頭や石製品の原料となる安山岩露頭だけでなく、銅製錬に用いられた銅の二次鉱物の利用に際して、それらの産地から近距離かつ高低差の少ない移動で到達可能な運搬コストの低い場所にあることも、その背景の一つであったと思われる。パコパンパは、すでにパコパンパ I 期からそうであったように、

多様な生態環境や地質学的特徴、景観といった様々な資源を、最も効率的に利用できる戦略的な場所に位置しているのである。

こうした状況をふまえたうえで、次に地表面採集と発掘調査で獲得された各遺跡の土器の特徴をみてみたい。パコパンパでは、パコパンパⅡ期になると土器の特徴が変化する。そして、パコパンパⅠ期に中心的にみられた北部熱帯低地のバグアとの類似性を示す土器にかわって、北部海岸のランバイエケ (Elera 1986; 1992) や北部山地のカハマルカ (Terada and Onuki 1982; 1985; 1988) との共通性をもつ土器が主としてみられるようになる。

ここで、パコパンパⅡ期のセトルメント・パターンと周辺地域への地域間移動ルートとの関係を見ると、パコパンパⅠ期にみられた東①、南東①だけでなく、新たに西①ルートとの関係が示唆されるようになる。西①ルートは北部海岸、あるいは西へぬけた後で南北の山間部移動に用いられるルートである。土器で認められた地域間交流の存在が、ここからも肯定される。ここで特筆すべき点は、チョターノ川流域のなかでも遺跡によって出土する土器に差異があることである。既述のようにパコパンパでは北部海岸との関係がより顕著になるが、パンダンチェではカハマルカのワカロマとの極めて高い共通性が認められる。これに関しては、パコパンパとパンダンチェのそれぞれの立地が関係していると考えられる。つまり、パンダンチェでは、カハマルカへと通じる地域間移動ルートにより近接していることもあり、パンダンチェ期から続くその地域間交流を、引き続き重視したということである。一方、パコパンパでは、尾根を登った先にある西①ルートも重視するようになった結果、北部海岸や北部山地の社会との地域間交流を活発におこなうようになったことが推測される。

パコパンパ遺跡の発掘調査結果が示すように、パコパンパⅡ期には土器以外にも地域間交流を示すデータが増加する。ラクダ科動物骨や黒曜石、金製品をともなう特殊な墓は、いずれも北部海岸やチョターノ川流域よりも南側に存在した社会との地域間交流を強く示唆するものである。また、パコパンパⅡ期に相当する形成期後期は、アンデスの各地で地域間交流が活発化した時期とされる (eg., Burger 1992; 加藤・関 1998)。しかし、カハマルカ盆地のワカロマ遺跡では、社会状況にそれ以前からの大きな変化は認められない (Terada and Onuki 1982; 1985; 1988)。この時期にペルー北部で大きな社会変化がみられるのは、北部山地のなかでもアンデス山脈分水嶺の西側に位置するクントゥル・ワシヤ (Inokuchi 1998; 2010; Onuki 1995; Onuki and Inokuchi 2011)、西①のルートから北上すると到達する北部山地と北部熱帯低地の狭間にあるインガタンボなどである (山本 2012)。こうしてみると、この時期のチョターノ川流

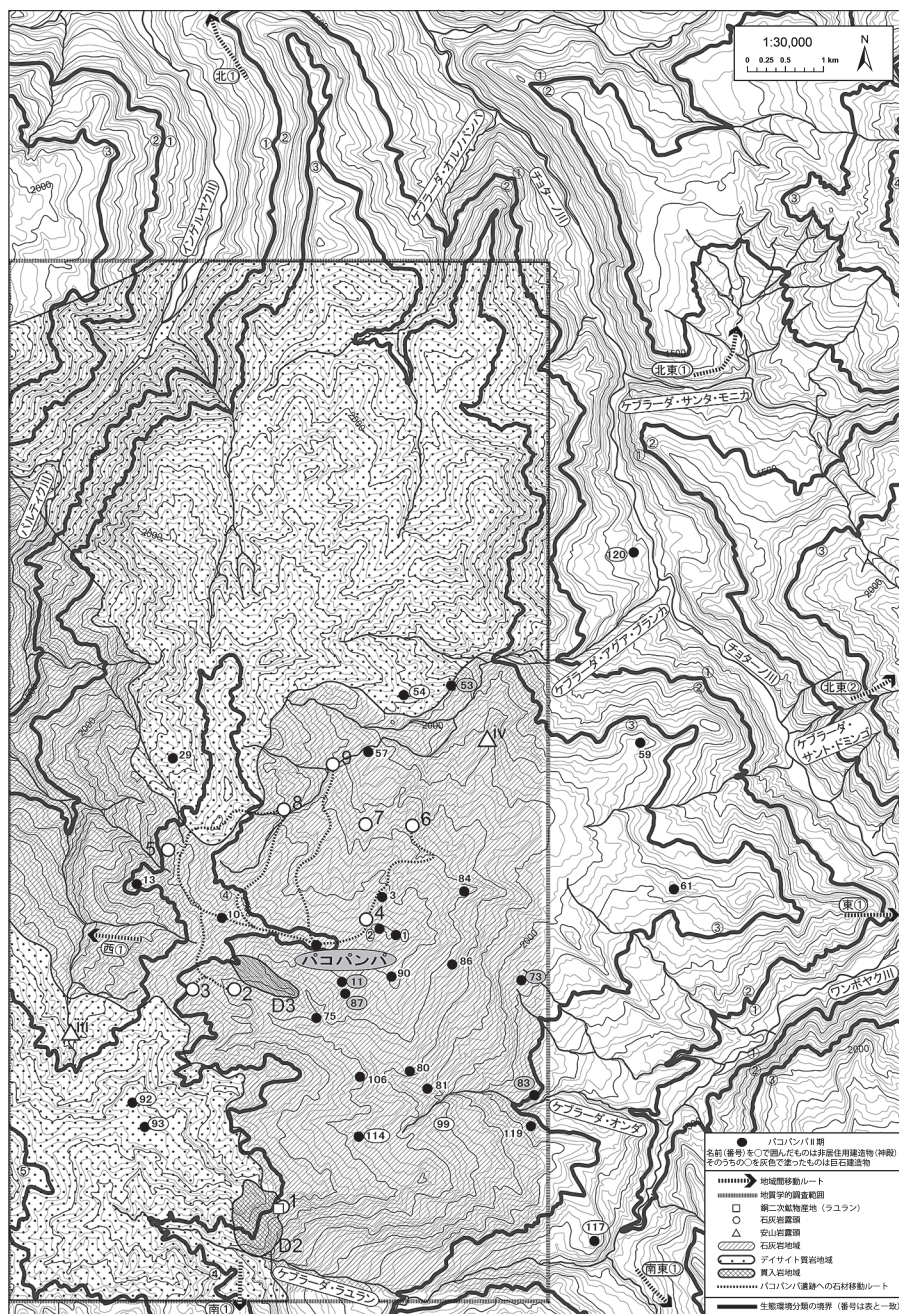


図7 パコバンバⅡ期の遺跡の分布状況と生態学的・地質学的特徴

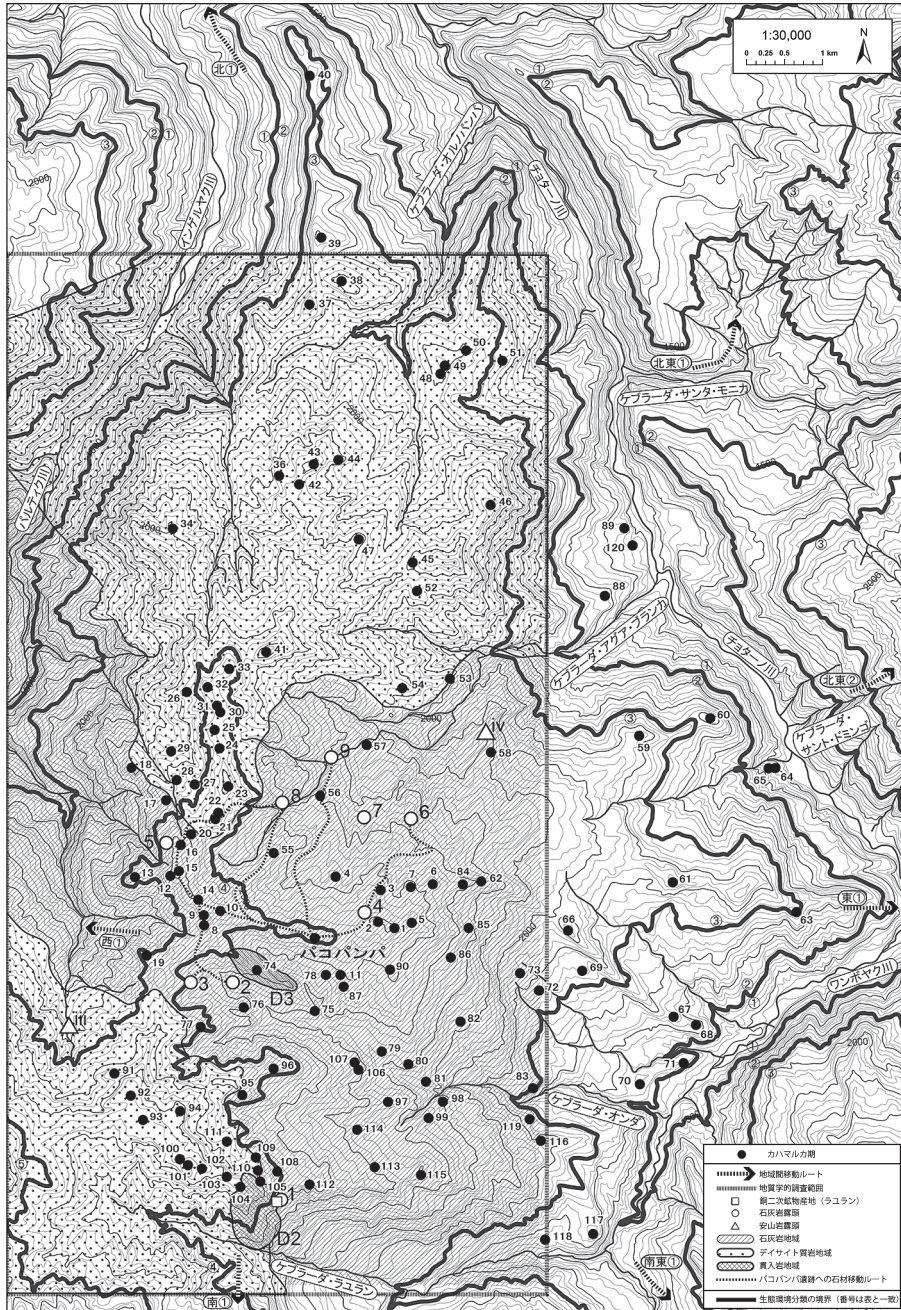


図8 カハマルカ期に属する遺跡の分布状況と生態学的・地質学的特徴

域に生じた変化、とくにパコパンパの大規模化と複雑化という現象には、北部海岸と分水嶺西側の北部山地、および北部熱帯低地の社会変化との連動性が認められる。

5.2 カハマルカ期のセトルメント・パターンとその特徴、および形成期との差異

既述のとおり、チョターノ川流域のカハマルカ期の状況については、調査に乏しく、精緻な土器編年も組まれていない。そのため、調査が充実しているカハマルカ盆地の編年をもとにして、各遺跡の時期を同定した。しかし、チョターノ川流域とカハマルカ盆地では、土器の出土状況（地表面採集状況）に差異がある。チョターノ川流域では、カハマルカ盆地で時期決定の指標とされる精巧なカオリン土器が、ほとんど確認されないのである。また、地表面で採集される土器は、粗製のローカルな特色をもったものが大半で、例外となるのは、わずかに認められるカハマルカ中期と後期、晩期の土器だけである。そこで、本節では、チョターノ川流域におけるカハマルカ期全体を通じたセトルメント・パターンの特徴を述べたあとで、カハマルカ中期から晩期の状況を可能な限り論じていく。セトルメント・パターンに関するデータは限定的ではあるが、形成期のデータと比較した際に、チョターノ川流域の特殊性を浮かびあがらせるうえで有益な視点が提供されよう。

まず、カハマルカ期全体をみると、全部で 120 遺跡の利用が確認されている（図 8）。遺跡分布調査で登録した遺跡のうち、ほとんどすべての遺跡でカハマルカ期の痕跡が認められたといえる。形成期と比べて、カハマルカ期では遺跡数の大幅な増加がみられる。

カハマルカ期の遺跡分布の特徴としては、形成期と同様に、とくに調査地の南側に遺跡が集まる一方で、より広範囲かつ海拔の高い地点の尾根上に多くの遺跡がみられるようになる点があげられる。

ここで、各遺跡と生態環境との関わりをみてみよう。その内訳は、有刺植物地帯－熱帯丘陵帯では 5 遺跡、乾燥森林地帯－熱帯丘陵帯では 7 遺跡、乾燥森林地帯－熱帯低山帯では 69 遺跡、湿潤森林地帯－熱帯低山帯では 38 遺跡、超湿潤森林地帯－熱帯山地では 1 遺跡となっている。形成期と同様に、カハマルカ期においても、遺跡分布の中心は、乾燥森林地帯－熱帯低山帯である。もちろん、それ以外の場所にも遺跡が分散するが、とりわけカハマルカ期には、湿潤森林地帯－熱帯低山帯において遺跡が急増する。形成期末期以降になって、それ以前よりも高地の生態環境が利用されるという現象は、集中的な調査が実施されてきたカハマルカ盆地でも確認されている

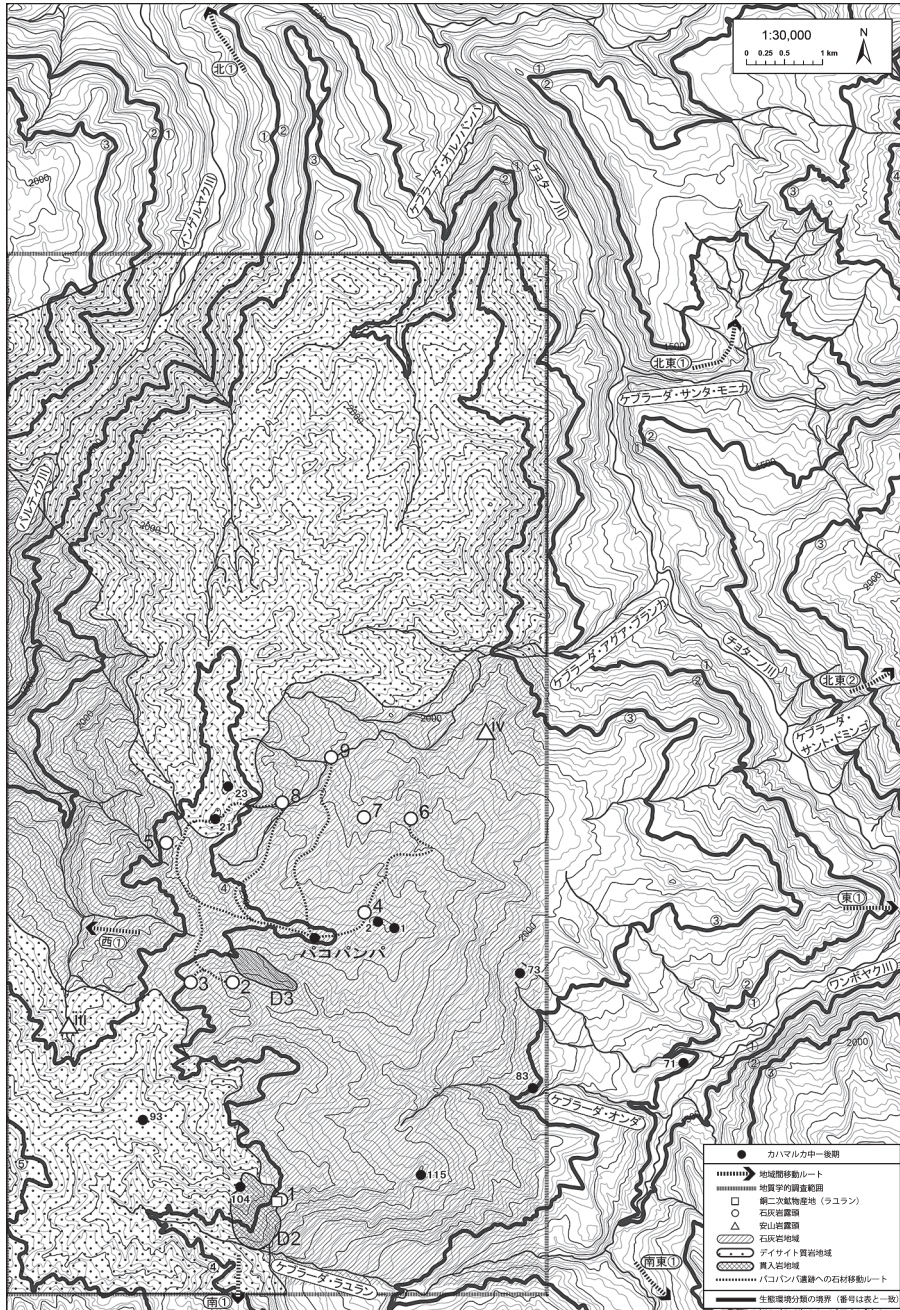


図9 カハマルカ中～後期の遺跡の分布状況と生態学的・地質学的特徴

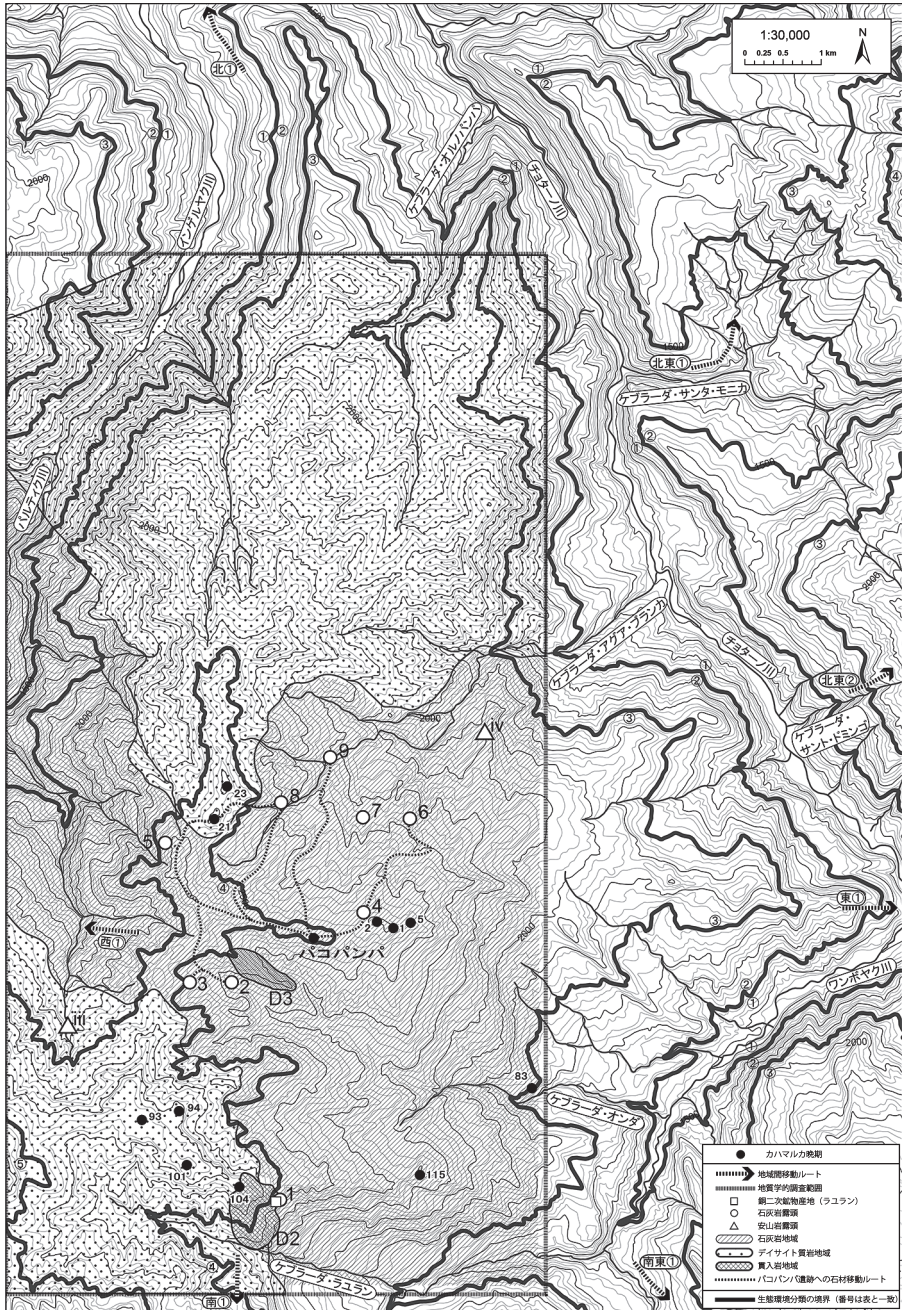


図 10 カハマルカ晩期の遺跡の分布状況と生態学的・地質学的特徴

(Seki 1993; 関 2006)。そして、調査者によれば、カハマルカ盆地では形成期末期に、農耕やラクダ科動物の家畜化といった様々な面で社会的に大きな変化が生じ、遺跡の立地も変化して、より高地の生態環境を利用しはじめたとされる。そのため、チョターノ川流域でも同様の変化が生じた可能性はある。

また、尾根上にならぶ遺跡分布については、セトルメント・パターン研究で防御用と考えられることもあるが (ex. 関 1998; Wilson 1988)、土塁や武具などの類は、チョターノ川流域では、これまでに確認されておらず、戦争の具体的証拠はない。

こうしてみると、遺跡分布の一般的傾向には、カハマルカ期に入って形成期よりも高地や尾根が重視されるようになるという明確な差異が存在する。ただし、遺跡分布がもっとも集中する生態環境は、形成期から大きく変化しない。また、カハマルカ期では、形成期ではあまりみられなかった調査範囲の北側にもセトルメントがひろがり、谷幅が狭く、斜面が急な北側の地域も積極的に利用されたことが明らかである。

現状のデータからは、これ以上の議論は困難といえるが、この問題の解決には、生態学的視点や戦争といった切り口だけではなく、当時の社会的状況を考慮した多角的かつ包括的な視野が必要であろう。

これらのことをふまえたうえで、以下では、カハマルカ期の状況を可能な範囲で時期ごとにみていきたい。

カハマルカ前期に関しては、発掘調査をおこなっているパコパンパ遺跡でその時期の活動が確認されている以外に、詳細は不明である。なお、繰り返しにはなるが、パコパンパは、乾燥森林地帯－熱帯低山帯に立地している。

カハマルカ中期になると 11 遺跡で利用が認められる (図 9)。ただし、この指標となった土器タイプのカハマルカ **Black and Orange** と **Red and Black** は、カハマルカ盆地で中期後半と後期にまたがって出土する土器¹⁶⁾である (渡部 2004: 62-69)。そのため、実際にはカハマルカ中期～後期とした方が正確である。カハマルカ中期～後期の 11 遺跡は、パコパンパを中心に点在している。この分布状況と生態環境との関係を見ると、乾燥森林地帯－熱帯丘陵帯に 1 遺跡、乾燥森林地帯－熱帯低山帯に 3 遺跡、湿潤森林地帯－熱帯低山帯に 6 遺跡、超湿潤森林地帯－熱帯山地に 1 遺跡となっている。

カハマルカ晩期には 12 遺跡の利用が確認されている (図 10)。そのうちの 9 遺跡はカハマルカ中期～後期からの利用が認められる。データが少なく、カハマルカ晩期の遺跡の分布特徴は明らかではないが、カハマルカ中期～後期とほとんど同様の傾向はみてとれる。

また、遺跡分布と生態環境との関係は、乾燥森林地帯－熱帯低山帯に3遺跡、湿潤森林地帯－熱帯低山帯に9遺跡となっている。カハマルカ晩期には、インカ道が通るため、チョターノ川流域は、南北の山地を結ぶ回廊のような役割をしていたと考えられるが、遺跡分布調査では、インカ道に関連する遺構は確認されていない。

このデータを形成期の遺跡分布状況と比較すると、北①、北東①、北東②、南①といった地域間移動ルートが、カハマルカ期にはじめて積極的に利用されはじめたことが推測される。もちろん、カハマルカ期においても、形成期に利用されていたルートが用いられた可能性はある。しかし、遺跡分布調査では、カハマルカ期の遺跡で北部海岸などに典型的な土器は確認されておらず、形成期の状況とはやや異なり、海岸部との地域間交流を示すデータは乏しい。このように、カハマルカ期のセトルメント・パターンの詳細には不明な点は多いが、カハマルカ中期以降にチョターノ川流域で活発な地域間交流が繰り返りひろげられるようになった点は指摘できる。

このようにして、カハマルカ期のデータ、およびそれとの比較から明らかとなった形成期の特徴は、以下の二点である。第一に、セトルメントに利用された場所が、限定的なことである。すでに述べてきたように、形成期のセトルメントには、谷幅が広く斜面が緩やかな調査地の南側で、かつ斜面の上下動を効率的におこなうことが可能な高地と低地の中間地点が重点的に利用されたためである。そして、もう一つは、セトルメントと地域間移動ルートとの関係、およびルートの選択である。形成期のチョターノ川流域社会は、流域の北に存在した社会との交流を有してはいたものの、流域の北側はルートとして積極的に利用されなかった。流域の北側に存在した社会との交流は、東西への地域間移動ルートを介しておこなわれたのである。その結果は、セトルメントの形成にも大きく作用したと考えられる。

5.3 周辺地域との比較からみるチョターノ川流域の特徴

これまで、チョターノ川流域の形成期のセトルメント・パターンについて詳細に論じ、それに続くカハマルカ期との比較によって、形成期の特殊性を浮かびあがらせてきた。本節では、チョターノ川流域の周辺地域の形成期の事例をとりあげ、チョターノ川流域のデータと比較検討することで、チョターノ川流域の特徴をより明確にしていく。なお、周辺地域としてとりあげるのは、ワンカバンバ川流域とカハマルカ盆地である。

ワンカバンバ川流域とカハマルカ盆地の形成期の編年は、概ねチョターノ川流域の編年と関連しているものの、その時間幅は多少異なる。そのため、以下では、チョ

ターノ川流域の編年を軸としつつ、両地域の事例についてまとめることで、比較検討をおこなう。

比較の対象となる時期は、ワンカバンバ川流域では、古い方からワンカバンバ期（紀元前 2500～1200年）、ポマワカ期（紀元前 1200～800年）、インガタンボ期（紀元前 800～550年）の3時期（山本 2012; 2014）、カハマルカ盆地では、前期ワカロマ期（紀元前 1500～1000年）、後期ワカロマ期（紀元前 1000～550年）の2時期（関 2006）である。

5.3.1 パンダンチェ期（ワンカバンバ期、前期ワカロマ期）

ワンカバンバ川流域では、ワンカバンバ期の状況は不明な点が多い（山本 2012: 322; 2014: 10–11）。明らかにされているのは1遺跡だけで、唯一の事例であるインガタンボでは小基壇が築かれる。ワンカバンバ期を通じて土器の利用は認められないが、その後半には海水生種の貝が出土する。

これに対して、カハマルカ盆地の前期ワカロマ期には、後の時期と比べて遺跡数が少なく、遺跡も盆地内に散在している。そして、小規模な基壇建造物が築かれ、土器の利用も認められる。先述したように、この土器はチョターノ川流域の土器との共通性が極めて高い。また、建造物の構造や、墓から出土する副葬品などに差異がみられないことから、比較的平等な社会が展開していたと考えられている（関 2006: 56–67）。

これらのことをふまえると、チョターノ川流域とカハマルカ盆地には、土器などの類似性から、地域間交流が存在し、共通性の高い社会的状況があったことが想起される。その一方で、カハマルカ盆地より地理的に近いワンカバンバ川流域とは、土器利用の有無などをはじめ、差異が大きい。このことは、単純な地理的距離が地域間交流をおこなう際の必要条件とはならないことを明示しており、こうした点に、パンダンチェ期のチョターノ川流域社会で独自性が生じた背景があると考えられる。

5.3.2 パコバンバI期（ポマワカ期、後期ワカロマ期）

ワンカバンバ川流域ではポマワカ期になると、遺跡数、とくに神殿数が増えて、急激な社会変化が生じたことが想定される（山本 2014: 11–12）。セトルメントの形成、とくに神殿の建設に際しては、水へのアクセスと水害のリスクのほか、隣接地域との地域間交流の効率性、つまりは地域間移動ルートへのアクセスがとくに重要視された。これは、全ての神殿が隣接地域へぬける地域間移動ルート沿いに位置しているこ

とから支持される。また、ポマワカ期では、海水生種の貝の出土が顕著となり、荷駄獣であるラクダ科動物もみられるようになる。つまり、ワンカパンバ流域社会が、ペルー北部の地域間交流網に組み込まれ、その要衝の一つとなったと考えられる。

そうしたなか、神殿の形態的特徴と規模からは、インガタンボのように、流域の社会的統合に際して、より中心的な役割を果たした神殿の存在が示唆される（山本 2012: 328）。ただし、複数の神殿が流域内に併存することから、流域全体を統合するような集団はなく、各神殿を核に複数の集団が共存していたと考えられる。そして、神殿更新のたびに大規模化して複雑化する空間構造や、奢侈品とされる遺物の出土状況からは、建設活動や執りおこなわれる儀礼において集団内での社会的差異が表出しはじめたことが想起される。しかし、階層性の存在は、いまだに物質文化には明確にあらわれない。このことから、基本的に、神殿をめぐる諸活動は、社会成員の協同性を基礎としておこなわれたと推測される（山本 2012: 327-328）。こうした神殿活動のありかたは、ペルー中央海岸のカルダルでも指摘され、神殿の建設活動や儀礼が、強力な政治的リーダーなしに共同体の協働労働として実施されたと考えられている（Burger and Salazar 1991: 292-294）。

カハマルカ盆地でも基本的には、同じような展開がみられる。後期ワカロマ期になると、遺跡数が増加して、盆地内に複数の神殿が築かれるようになる。セトルメントは、全体として地域的に三つのグループにわかれるとされ、なかでも神殿は盆地西部に集中する。注意すべきは、この盆地西部が、建材となる石質砂岩の露頭や、土器の胎土となる良質な粘土を採集できる場所でもあるということである。つまり、神殿の建設に際して、生態学および地質学的要因がとくに重視されていたことが推測される（関 2006: 77-79）。

また、盆地底部にあるワカロマ神殿では、建設活動や儀礼が活発化した結果、神殿が大規模化かつ複雑化したことが明らかとなっている。さらに、神殿の壁面には動物表現をとまなうような多彩色壁画が描かれたほか、図像をはじめとして様々な装飾が施された精製土器もあらわれるようになった。この背景としては、社会統合におけるイデオロギーの重要性が増し、神殿での諸活動を統御するようリーダーが存在したことが示唆される（関 2006: 80-86）。

後期ワカロマ期の土器は、前期ワカロマ期のものとは大きく異なり、装飾や図像表現などからパコパンバをはじめとした北部山地や北部熱帯低地との共通性が示されるほか、北部海岸に典型的な還元焼成の黒色土器も出土する。それと同時に、荷駄獣となるラクダ科動物骨も出土しはじめる。また、石製品や骨角貝器などのバリエーショ

ンが増加するだけでなく、加工具とされる遺物も出土するため、ワカロマ神殿では、それらの製作活動がおこなわれていたと考えられている（関 2006: 89-93）。

この時期のカハマルカ盆地では、ワカロマのほかにもライソンという大規模神殿が築かれる。しかし、ワカロマとライソンには、その立地や建設技術、神殿の形態などに大きな差異がある。また、ライソンは尾根上に位置しており、ワカロマと比べて、周囲に神殿を支える人々が生活するための居住域をかかえることは困難であるという。さらに、ライソンは、北部海岸へぬけるルート上に位置しており、その立地には盆地外部との地域間交流が関係したことが指摘されている。そのため、調査者によって、両神殿は、異なる機能を有した神殿であり、ワカロマは盆地底部の集落の神殿で、ライソンは盆地底部の神殿を統合する役割を担っていたものと推測されている（関 2006: 93-99）。

最後に、後期ワカロマ期には、編年的に形成期中期と汎アンデスで大きな社会変化が生じた時期とされる形成期後期の前半がふくまれている。そこで、仮にライソンが後期ワカロマ期後半、つまり形成期後期に築かれたものと想定するならば、神殿が建設された背景には、地域間交流のコントロールが重要な役割をはたした可能性があるという（関 2006: 97-99; 128-130）。

このようにしてみると、チョターノ川流域で確認された現象は、ワンカバンバ川流域やカハマルカ盆地でも認められる一方で、同時に両地域との間に明確な差異も存在する。

たとえば、遺跡数が増加し、それとともに多くの神殿が建設されるという点は、チョターノ川流域と両地域で共通する現象である。ただし、セトルメントが形成された背景をみると、セトルメント・パターン、とくに神殿と生態環境および地質学的要因との関係については、カハマルカ盆地との共通性が高く、神殿と地域間移動ルートとの関係では、ワンカバンバ流域の事例により近い。

また、各地域の神殿で増改築がおこなわれ、神殿が大規模化するとともに複雑化しはじめたことも共通した事項である。そして、建設活動や神殿でおこなわれた儀礼、あるいは製作活動において、リーダーと称されるような人々の存在も次第に顕在化していく。この際、地域内に複数の神殿が存在していることから、それぞれの神殿が神殿活動を支える比較的小規模な集団ごとに協働性を基礎として独自に活動し、共存していたことが想起される。ただし、神殿の形態的特徴と規模からみると、地域内でもより多くの人々を集め、地域的な社会的統合に際して、中心的な役割をはたした神殿の存在が示唆される。

このような観点にたった場合に興味深いのは、カハマルカ盆地のワカロマとライソンの関係である。両神殿は、立地や建築技術、形態といった様々な面での差異から、異なる機能を有した神殿であったことが想定されており、このような機能分化がチョターノ川流域にも存在した可能性は否定できない。つまり、パコパンパとその他の神殿との関係である。居住を主としたセトルメントが集中する生態環境に位置したパンダンチェをはじめとする複数の神殿は、それぞれが小集団の神殿であった一方で、パコパンパは流域の神殿を統合する役割をはたしたと考えるのである。ただし、こうしたパコパンパの役割がより明確になるのは、パコパンパI期の終わりからパコパンパII期にかけて以降であったと思われる。

パコパンパI期は、ペルー北部の各地で地域間交流が活性化しはじめ、北部山地と北部熱帯低地の社会間における共通性が顕著となる時期である。そのため、地理的に両者の中間地点にあるチョターノ川流域では、両地域社会の動きと連動したような現象がみられたと考えられる。しかし、中間地点にあるからといってチョターノ川流域が、単純に両者の折衷の様相を呈するわけではない。チョターノ川流域は、それととりまく固有の諸環境に即して、これまでに述べてきたような独自の展開をみせたのである。

5.3.3 パコパンパII期（インガタンボ期）

ワンカバンバ川流域では、インガタンボ期になると遺跡数が減少する（山本 2014: 12）。そして、ポマワカ期から流域の社会的統合の中心的役割にあったインガタンボだけで神殿が大規模化し、複雑化する。このように特定の神殿に、神殿をめぐる活動が収斂する現象は、この時期の北部山地ヘケテベケ川流域でも指摘されている（e.g. 加藤 2010）。つまり、各地で地域的統合の核となるような神殿が出現したと考えられるのである。また、ワンカバンバ川流域でインガタンボに活動が収斂した背景には、インガタンボが流域内に存在する東西南北全方向への地域間移動ルートの結節点であったことがあげられる（山本 2012: 328–329）。

ワンカバンバ川流域では、インガタンボ神殿が大規模化し、空間構造が複雑化するなかで、建設活動や神殿でおこなわれる儀礼や製作活動において、リーダーとその他の成員という社会的差異が顕在化していった。ただし、それと同時に、集団の社会的紐帯を目的として、トウモロコシからつくられたチチャ酒が、ふるまわれた可能性もある。

また、地域間交流によってもたらされた奢侈品の獲得と管理は、リーダーの権力基

盤となり、地域間交流がさらに促進されたと考えられる（山本 2012: 371-373）。さらに、こうした集団内部の社会的差異は、金製品をともなう特殊な埋葬という形で、物質文化に明確にあらわされるようになった。こうした現象は、インガタンボだけではなく、北部山地のクントゥル・ワシでも報告されている（加藤・関 1998; 大貫・加藤・関 2010）。つまり、この時期には、神殿をめぐる活動に質的な変化が生じて、リーダーの権力を集団の成員に認識させ、その権力基盤を正統化し、確固とする契機や手段に変化したと考えられる（山本 2012: 402）。そのため、形成期後期には、地域間交流が活発化して、広範な地域で技術革新や階層化を含む社会変化が、同時期的に生じたとされるのである（Burger 1988; 1992; 1993; 2008）。

この現象は、もちろんチョターノ川流域でも確認される。現在も継続中のパコパンパ遺跡の発掘調査が明らかにしてきたように、同流域では神殿の社会的位置づけが変化して、パコパンパが流域全体の社会統合装置となったと考えられるのである。先述したように、こうしたパコパンパの役割は、パコパンパI期の終わりごろから認められはじめる。ただし、他地域、あるいはチョターノ川流域社会の諸神殿とも異なるパコパンパの特徴は、生態環境と地質学的特徴を最大限に活用した金や銅の製錬およびとくに銅製品の製作や管理にある。そして、これがパコパンパの最大の強みともなり、この時期から増加するラクダ科動物をともなう地域間交流を通じて、銅製品をはじめとした様々な物資がパコパンパから周辺地域社会にもたらされたことが推測される。そして、製錬や製作に関わる技術や情報は、リーダーの権力基盤ともなったであろう。

以上のように、チョターノ川流域と周辺地域の形成期のセトルメント・パターンを比較すると、その形成の背景や通時的変化の様態には多様性がみられる。しかし同時に、それぞれの地域社会は、神殿を中心とした地域間交流で結ばれており、汎地域的な連動性も認められる。こうした状況こそが、現在の研究でも盛んに取り沙汰される、アンデス全体の共通性と地域ごとの多様性をめぐる議論の根幹であると考えられる。

6 結論——チョターノ川流域社会の形成と変遷

本節では、前節までの考察および論考の要点をまとめて、結論とする。その際、各遺跡の特性や立地、遺跡間相互の関係、環境利用および地域間交流といった点を中心に、環境決定論に陥らずにチョターノ川流域社会の人々による能動的選択の結果とし

て、セトルメント・パターンの通時的变化をとらえる。

これまでみてきたように、形成期のチョターノ川流域社会の形成と変遷に際しては、神殿が重要な役割をはたした。このことは、広くアンデスで認められている現象ではあるが、それと同様に、神殿の社会的位置づけや役割、および機能の地域的あるいは時期的多様性も認識される。

他地域の事例と同様に、チョターノ川流域の事例においても、基本的には、形成期におけるセトルメント・パターン成立の背景として、地形的条件や生態環境が存在する。ただし、重要なことは、セトルメントの形成に際して、単に周囲の環境に規定されるだけでなく、人々がそれを改変し、最大限に利用してきたことである。そして、当時の人々は、生活を営む際に、斜面が緩やかで耕作地となるような広い土地で、かつ地域の複数のマイクロな生態環境を効率的に活用できる、斜面の上下動がもっとも効率的におこなえる場所を選択した。ただし、形成期においては、続くカハマルカ期と比較して、より限定された範囲が集中的に利用され、より高地の環境や調査地北側の斜面が急な場所はあまり利用されなかった。

また、神殿の建設においては、地形や生態環境を最大限に利用するだけでなく、地質学的特徴や地域間移動ルートへのアクセス、さらには景観が、深く考慮された。そのなかでもとくに、パコパンパの神殿では、周囲に建材や石製品の産地が存在しただけでなく、銅の産地やペルー北部の周辺地域社会との地域間移動ルートへのアクセスが重視された。また、複数の神殿の分布状況を見ると、それぞれの生態環境において集団ごとに神殿が築かれ、各集団の社会的統合の中心となっていたと考えられる。

こうした状況のなかで、所与の条件を最大限に利用できる戦略的な場所に立地しているパコパンパの神殿では、建設や様々な製品の製作などといった諸活動が活発化し、流域内で最大規模を誇るようになる。つまり、パコパンパとそれ以外の神殿では、その役割に差異が生じ、パコパンパが流域全体を統合する中心的な神殿となっていったと考えられるのである。パコパンパでは、パコパンパⅠ期からパコパンパⅡ期にかけて社会の階層性が萌芽し、リーダーと考えられる人々があらわれるが、彼らの権力基盤は、とりまく環境を操作し、掌握することで生じたことが推測される。その際に、パコパンパの最大の強みとなったのが、銅製錬と地域間移動ルートへのアクセスであった。そして、それらを土台としながら、パコパンパⅡ期では、リーダーがさらに中心性を高めていくことになったのである。

このようにみると、神殿のはたした役割に応じて、あるいは時期的に、神殿社会を成立させる背景にある諸要因のバランスは、たえず変化していたことが推測される。

つまり、時と状況に応じて、諸要因のどれを重要視するのか、あるいはどれを組み合わせるのか、という選択がおこなわれた結果、チョターノ川流域の神殿に多様性が生じたと考えられるのである。そしてそれには、社会のリーダーの戦略が、大きく関与したであろう。この結果、チョターノ川流域では、形成期を通じて、神殿を中心とした継続的な展開がみられながらも、他地域のそれとは異なる、固有の社会形成と変遷のあり方が存在することになったのである。

以上のように、チョターノ川流域の社会動態を究明する際に、地域の歴史性や、実際に社会を動かした行為主体者となる人々の活動や戦略を考慮することは重要である。しかし人々の生活は、かれらをとりにまわく環境に大きく作用される。かつての環境決定論ではないにしても、環境が与えた影響は、チョターノ川流域において極めて大きかったと考えられる。そのため、周囲の環境を最大限に活用するために、チョターノ川流域では、比較的限定された利便性の高い場所にセトルメント、とくに重要な神殿が築かれたのである。

また、そうして築かれたセトルメントや神殿は、一度形作られると、人々の活動や戦略に影響をおよぼす存在となり、人々をとりにまわく環境の一部ともなる。つまり、こうした人間と環境との相互作用を繰り返しながら、チョターノ川流域社会は変化を遂げてきたと考えられるのである。

人々が所与の環境をいかに利用し、どう改変してきたのかという過程をおう際には、人々と環境との相互関係を強調するだけでなく、その関係のあり方を多層的に明らかにしていくことこそが、現在のセトルメント・パターン研究において重要であると考えられる。

今後は、蓄積され続けるパコパンパ遺跡の発掘調査成果を通じて、本稿で示した考察結果を検証し、修正、あるいは精緻化していくことが不可欠である。同時に、多くの研究者にもすでに認識されている社会変化と地域間交流の関係性を、より実証的に示していくことが必要である。そのためには、地域間交流の鍵となるような地域、とくにこれまで研究が実施されてきた地域間を結ぶような場所での調査・研究が求められる。また、チョターノ川流域をはじめとしたペルー北部で、とくに形成期を中心にみられた現象が、ペルー北部以外の地域や他の時期においてどのように認められるのかという問題にも、比較検討を通じて積極的に取り組んでいくことも重要であろう。さらに、今後は、アンデスの特徴の一つでもある多様な生態環境を議論に組み込んでいくために、対象とする地域や時期の古環境の復元を考慮に入れる必要がある。まだまだ課題は多いものの、上記の課題を少しずつクリアしていくことで、先史アンデス

文明研究に寄与していくことができると筆者は考えている。

謝 辞

この調査は、「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築（科学研究費補助金・基盤研究S・研究代表者：関雄二）」の一環として、実施されたものです。本稿の執筆に際し、国立民族学博物館の関雄二教授をはじめとした、アンデス調査団の先生方には多くのご教示ならびにご助力を承りました。また、南山大学の渡部森哉氏と総合研究大学院大学博士課程の中川渚氏には、土器の分析でご助力をいただきました。さらに、国立民族学博物館の荒田恵氏と市川彰氏には、論文について有益なコメントをいただき、伊藤裕子氏には図面の作成でお世話になりました。ここに記して深謝の意を表します。

注

- 1) 調査団は、東京大学を核に編成された後で、一旦埼玉大学へと移行したが、現在では国立民族学博物館をその中心として、活動が展開されている。
- 2) 発展段階的時期区分を用いないものが、アメリカの研究者を中心に利用される「ホライズン」と「中間期」を組み合わせた編年である。ここでいう「ホライズン」とは広範囲に一定の芸術様式が分布する時期のことであり、「中間期」とはそれとは逆に、地域的多様性が広く認識される時期のことである（Rowe 1962）。
- 3) 一般に「涸れ谷」と訳されるが、常に水をたたえるケブラーダもある。
- 4) 海岸ユンガと山間ユンガの二つがある。前者はアンデス西斜面の河川の中流域にあたり、後者は山間部の谷底や盆地の底部にあたる。研究対象地域は後者で、海拔1,000～2,300 mの河川の谷底や盆地底部、山麓地帯がそれに該当する。降水量が多く、湿度も高い。果物やマニオク（*Manihot esculenta*）、トウモロコシ（*Zea mays*）に加え、コカ（*Erythroxylon coca*）など熱帯や亜熱帯産の作物などが栽培される（Pulgar Vidal 1987: 52–62）。
- 5) 海拔2,300～3,500 mの山の斜面や山間盆地、山間の谷間にあたり、ユンガに比べてやや寒冷である。降水量はユンガと比べて若干多いが、大差はない。トウモロコシ、マメ類、ムギ類などが栽培される（Pulgar Vidal 1987: 67–75）。
- 6) 海拔3,500～4,000 mの山の斜面および河川の源流部分に該当する。ケチュアと比べても降水量が多く、寒冷である。そのため、ジャガイモ（*Solanum tuberosum*）やオカ（*Oxalis tuberosa*）などの根菜類や雑穀のキヌア（*Chenopodium quinoa*）が栽培の中心となり、ラクダ科動物の飼養もみられるようになる（Pulgar Vidal 1987: 80–87）。
- 7) パコバンパ遺跡の大部分を、ペルー国立サン・マルコス大学が所有していることもあり、当大学関係者によって、様々な調査がおこなわれてきたという経緯がある。
- 8) モラーレスの論文では、海拔が2,000～2,900 mまでとされているが、2,000 mは2,200 mの誤りであると考えられる。
- 9) インカの支配地域に整えられた、現在のコロンビアからチリ、アルゼンチンにまでおよぶ道路網である。海岸部と山地にそれぞれ一つずつの幹線道路が南北方向に伸び、東西方向も他の道路で結ばれている（Hyslop 1984）。
- 10) 文化庁主導で実施されたインカ道、および関連遺跡の調査であり、国家プロジェクトである。
- 11) 建造物がなく、地表面に土器が数点落ちていただけでは、遺跡として登録していない。
- 12) 土砂を積み上げて三面、あるいは四面を石壁で支えた直方体の構造である。
- 13) 地面をならすか、盛り土をして整地した、土留め壁で支えられた段状の構造である。
- 14) 地面を掘り下げ、周囲に土手や壁を造ってその内部を広場とするもので、形状が円形のを円形半地下式広場、方形のを方形半地下式広場とよぶ。
- 15) 名は知られたパラトン遺跡があるが（Morales 1998: 117, 120）、遺跡に関する詳細は不明であ

- る。また、ママバンバには尾根上に遺跡があるが、筆者が訪れた際に地表面で散見された土器の分析によれば、カハマルカ期のものと考えられる。
- 16) Black and Orange と Red and Black はともに、カハマルカ期中期 B と C からカハマルカ期後期にかけて出土する土器である (渡部 2004: 62-69)。

文 献

- Albarracin-Jordan, J.
1996 Tiwanaku Settlement System: The Integration of Nested Hierarchies in the Lower Tiwanaku Valley. *Latin American Antiquity* 7: 183-210.
- Anschuetz, K. F., R. H. Wilshusen and C. L. Sheick
2001 An Archaeology of Landscapes: Perspectives and Directions. *Journal of Archaeological Research* 9(2): 157-211.
- 荒田 恵
2013 「パコパンバ遺跡における工芸品製作——金および銅製錬を中心に」科学研究費補助金 (基盤研究 S) 『権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築』 (研究代表者: 関雄二・国立民族学博物館教授) 研究会配布資料。
- 荒田 恵・清水正明・中島真美・清水マリナ
2012 「形成期, パコパンバ遺跡における冶金——銅製錬および金製錬と銅製品・金製品の製作」古代アメリカ学会第 17 回研究大会配布資料。
- Ashmore, W. and A. Bernard Knapp (eds.)
1999 *Archaeologies of Landscape: Contemporary Perspectives*. Malden: Blackwell.
- Balkansky, A. K.
2006 Surveys and Mesoamerican Archaeology: The Emerging Macroregional Paradigm. *Journal of Archaeological Research* 14: 53-95.
- Bandy, M. S.
2005 Trade and Social Power in the Southern Titicaca Basin Formative. In K. Vaughn, D. Ogburn and C. A. Conlee (eds.) *Foundations of Power in the Prehispanic Andes* (Archaeological Papers of the American Anthropological Association 14), pp. 91-111. Arlington: American Anthropological Association.
- Billman, B. R.
1996 *The Evolution of Prehistoric Political Organizations in the Moche Valley, Peru*. Ph.D. Dissertation. Santa Barbara: University of California.
1999 Settlement Pattern Research in the Americas: Past, Present, and Future. In B. Billman and G. M. Feinman (eds.) *Settlement Pattern Studies in the Americas*, pp. 1-8. Washington and London: Smithsonian Institution Press.
- Binford, L. R.
1962 Archaeology as Anthropology. *American Antiquity* 28(2): 217-225.
- Binford, S. R. and L. R. Binford (eds.)
1968 *New Perspectives in Archaeology*. Chicago: Aldine Publishing Company.
- Burger, R. L.
1985 Concluding Remarks: Early Peruvian Civilization and Its Relation to the “Chavin Horizon”. In C. B. Donnan (ed.) *Early Ceremonial Architecture in the Andes*, pp. 269-289. Washington D.C.: Dumbarton Oaks Research Library and Collection.
1988 Unity and Heterogeneity within the Chavin Horizon. In: R. W. Keating (ed.) *Peruvian Prehistory; An Overview of Pre Inca and Inca Society*, pp. 99-104. Cambridge: Cambridge University Press.
1992 *Chavin and the Origins of Andean Civilization*. London: Thames and Hudson.
1993 The Chavin Horizon: Stylistic Chimera or Socioeconomic Metamorphosis? In D. S. Rice (ed.) *Latin American Horizon: A Symposium at Dumbarton Oaks*, pp. 41-82. Washington D. C. Dumbarton Oaks Research Library and Collection.
2008 Chavín de Huántar and its Sphere of Influence. In H. Silverman and W. H. Isbell (eds.)

- Handbook of South American Archaeology*, pp. 681–703. New York: Springer.
- Burger, R. L. and L. Salazar-Burger
1991 The Second Season of Investigations at the Initial Period Center of Cardal Lurin Valley. *Journal of Field Archaeology* 18(3): 257–296.
- Contreras, D. A.
2007 *Socio Political and Geomorphologic Dynamics at Chavín de Huántar, Peru*. Ph.D dissertation. Department of Anthropological Sciences, Stanford University.
2010 Landscape and Environment: Insights from the Prehispanic Central Andes. *Journal of Archaeological Research* 18: 241–288.
2011 How far to Conchucos? A GIS Approach to Assessing the Implications of Exotic Materials at Chavín de Huántar. *World Archaeology* 43(3): 380–397.
- Daggett, R.
1984 The Early Horizon Occupation of the Nepeña Valley, North Central Coast of Peru. Ph.D. Dissertation, University of Massachusetts.
- Elera, C.
1986 *Investigaciones sobre Patrones Funerarios en el Sitio Formativo del Morro de Eten, Valle de Lambayeque, Costa Norte del Perú*. Memoria de Bachiller. Lima: Pontificia Universidad Católica del Perú.
1992 Arquitectura y Otras Manifestaciones Culturales del Sitio Formativo del Morro de Eten: Un Enfoque Preliminar. In: D. Bonavia (ed.) *Estudios de Arqueología Peruana*, pp. 177–192. Lima: Fomciencias.
- Espinosa, R.
2002 *La Gran Ruta Inca, El Cápaq Ñan*. Lima: Petróleos del Perú.
- Flannery, K. V.
1972 The Cultural Evolution of Civilizations. *Annual Review of Ecology and Systematics* 3: 399–426.
- Flores Espinosa, I.
1975 *Excavaciones en El Mirador, Pacopampa*. Lima: Seminario de Historia Rural Andina. Universidad Nacional de San Marcos.
- Fung Pineda, R.
1975 Excavaciones en Pacopampa, Cajamarca. *Revista del Museo Nacional* 41: 129–207.
- Goldstein, P.
2000 Exotic Goods and Everyday Chiefs: Long-Distance Exchange and Indigenous Sociopolitical Development in the South Central Andes. *Latin American Antiquity* 11(4): 335–361.
- Haas, J.
1987 Introduction. In J. Haas, S. Pozorski and T. Pozorski (eds.) *The Origins and Development of the Andean State*, pp. 1–4. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hodder, I.
1982 *Symbols in Action: Ethnoarchaeological Studies of Material Culture*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hyslop, J.
1984 *The Inka Road System* (Studies in Archaeology). Orlando: Academic Press.
- 井口欣也
1998 「神殿から国家へ：中央アンデス地帯の形成期社会における神殿と社会の展開について」大貫良夫・木村秀雄編『文化人類学の展開——南アメリカのフィールドから』pp. 47–68, 東京：北樹出版。
- 井口欣也・大貫良夫・鶴見英成・松本雄一・アルバロ, ルイス
2002 「ペルー、ワスコ盆地一般調査概報」『古代アメリカ』5: 69–88。
- Inokuchi, K.
1998 La Cerámica de Kuntur Wasi y el Problema Chavín. *Boletín de Arqueología PUCP* 2: 161–180.
2010 La Arquitectura de Kuntur Wasi. *Boletín de Arqueología PUCP* 12: 219–248.
- 金田明大・津村宏臣・新納 泉
2001 『考古学のための GIS 入門』東京：古今書院。

- 加藤泰建
 1993 「アンデス形成期の祭祀建築」『民族芸術』9: 37-48。
 2010 「大神殿の出現と変容するアンデス社会」大貫良夫・加藤泰建・関 雄二編『古代アンデス：神殿から始まる文明』pp. 105-152。東京：朝日新聞出版。
- 加藤泰建・関 雄二編
 1998 『文明の創造力：古代アンデスの神殿と社会』東京：角川書店。
- Kaulicke, P.
 1975 *Pandanche: Un Caso del Formativo en los Andes de Cajamarca*. Lima: Seminario de Historia Rural Andina. Universidad Nacional de San Marcos.
- Kowalewski, S. A.
 2008 Regional Settlement Pattern Studies. *Journal of Archaeological Research* 16: 225-285.
- ルンブレラス, L. G.
 1977 (1974) 『アンデス文明—石器からインカ帝国まで』増田義郎訳, 東京：岩波書店。
- McIntosh, S. K.
 1999 Floodplains and the Development of Complex Society: Comparative Perspectives from the West African Semi-arid Tropics. In E. A. Bacus and L. J. Lucero (eds.) *Complex Polities in the Ancient Tropical World* (Archeological Papers 9), pp. 151-165. Arlington: American Anthropological Association.
- Moore, J. D.
 1996 *Architecture and Power in the Ancient Andes: The Archaeology of Public Buildings*. Cambridge: Cambridge University Press.
 2005 *Cultural Landscape in the Ancient Andes: Archaeologies of Place*. Gainesville: University Press of Florida.
- Morales, D.
 1980 *El Dios Felino en Pacopampa*. Lima: Seminario de Historia Rural Andina. Universidad Nacional Mayor de San Marcos.
 1998 Investigaciones Arqueológicas en Pacopampa, Departamento de Cajamarca. *Boletín de Arqueología PUCP* 2: 113-126.
- Núñez, L. and T. S. Dillehay
 1995 *Movilidad Giratoria, Armonía Social y Desarrollo en los Andes Meridionales: Patrones de Tráfico e Interacción Económica*. Antofagasta: Universidad Católica del Norte.
- ONERN (Oficina Natural de Evaluación de Recursos Naturales)
 1977 Inventario, Evaluación y Uso racional de los Recursos Naturales de la Zona Norte del Departamento de Cajamarca. Informe Vol.1. Lima: República del Perú.
- 大貫良夫・加藤泰建・関 雄二編
 2010 『古代アンデス：神殿から始まる文明』東京：朝日新聞出版。
- Onuki, Y. (ed.)
 1995 *Kuntur Wasi y Cerro Blanco, Dos sitios del Formativo en el Norte del Perú*. Tokio: Hokusen-sha.
- Onuki, Y. and K. Inokuchi
 2011 *Gemelos Prístinos El tesoro del templo de Kuntur Wasi*. Lima: Congreso del Perú.
- Pozorski, S. and T. Pozorski
 1987 *Early Settlement and Subsistence in the Casma Valley, Peru*. Iowa: University of Iowa Press.
- Proulx, D.
 1968 *An Archaeological Survey of The Nepeña Valley, Peru* (Research Reports Number 2). Amherst: Department of Anthropology University of Massachusetts.
 1973 *Archaeological Investigations in the Nepeña Valley, Peru* (Research Report Number 13). Amherst: Department of Anthropology, University of Massachusetts.
 1985 *An Analysis of the Early Cultural Sequence in the Nepeña Valley, Peru* (Research Report Number 25). Amherst: Department of Anthropology, University of Massachusetts.
- Pulgar Vidal, J.
 1987 *Geografía del Perú: Las Ocho Regiones Naturales (Novena Edición)*. Lima: PEISA.

- Ravines, R.
1983 *Inventario de Monumentos Arqueológicas del Perú, Zona Norte (Primera Aproximacion)*. Lima: Instituto Nacional de Cultura.
- Renfrew, C. and J. F. Cherry
1986 *Peer Polity Interaction and Socio-Political Change*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Rosas, H.
1974 Investigaciones Arqueológicas en la Cuenca del Chotano, Cajamarca. Artículo Reproducido de las Actas del XLI Congreso Inenacional de Americanistas. Vol.3. Mexico.
- Rosas, H. and R. Shady
1970 *Pacopampa: Un Centro Formativo en la Sierra, Nor-Peruana*. Lima: Seminario de Historia Rural Andina. Universidad Nacional Mayor de San Marcos.
1974 Sobre el período Formativo en la sierra del Extremo Norte del Perú. *Arqueológicas* 15: 6–36.
- Rowe, J.
1962 Stages and Periods in Archaeological Interpretation. *Southwestern Journal of Anthropology* 18(1): 40–54.
- Sakai, M., J. P. Villanueva, Y. Seki, W. Tosso and A. Espinoza
2008 Organización del Paisaje en el Centro Ceremonial Formativo de Pacopampa. *Arqueología y Sociedad* 18: 57–68.
- Santillana, J. I.
1975 *Prospección Arqueológica en Pacopampa*. Lima: Seminario de Historia Rural Andina. Universidad Nacional Mayor de San Marcos.
2005 Prospección en el Sitio Arqueológico de Pacopampa. *Arqueología y Sociedad* 16: 181–192.
- 関 雄二
1998 「形成期神殿の終焉」加藤泰建・関 雄二編『文明の創造力：古代アンデスの神殿と社会』pp. 225–266, 東京：角川書店。
2006 『古代アンデス権力の考古学』京都：京都大学学術出版会。
2010 「形成期社会における権力の生成」大貫良夫・加藤泰建・関 雄二編『古代アンデス：神殿から始まる文明』pp. 153–202. 東京：朝日新聞出版。
2014 「パコパンパ遺跡 2013 年度発掘報告」科学研究費補助金（基盤研究 S）「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」（研究代表者：関 雄二・国立民族学博物館教授）研究会配布資料。
- Seki, Y.
1993 La Transformación de los Centros Ceremoniales del Período Formativo en la Cuenca de Cajamarca, Perú. In L. Millones and Y. Onuki (eds.) *El Mundo Ceremonial Andino* (Senri Ethnological Studies 37), pp. 143–168. Osaka: National Museum of Ethnology.
2014 La Diversidad del Poder en la Sociedad del Período Formtaivo: Una Perspectiva desde la Sierra Norte. In Y. Seki (ed.) *El Centro Ceremonial Andino—Nuevas Perspectivas para los Periodos arcaico y Formativo—*(Senri Ehnological Studies 89), pp. 175–200. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 関 雄二・マウロ、オルドーニェス
2013 「ペルー北高地パコパンパ遺跡における石彫の発見」古代アメリカ学会第 18 回研究大会配布資料。
- Seki, Y., W. Tosso, J. P. Villanueva and K. Inokuchi
2006 Proyecto Arqueológico Pacopampa '05: Avances y Correlaciones Regionales. *Arqueología y Sociedad* 17: 149–177.
- Seki, Y., J. P. Villanueva, M. Sakai, D. Alemán, M. Ordóñez, W. Tosso, A. Espinoza, K. Inokuchi and D. Morales.
2010 Nuevas Evidenciales del Sitio Arqueológico de Pacopampa en la Sierra Norte del Perú. *Boletín de Arqueología PUCP* 12: 69–95.
- Shady, R.
1973 *La Arqueología de la Cuenca Inferior del Utcubamba*. Ph.D. Dissertation. Universidad Nacional Mayor de San Marcos.

- 1983 Una Aproximación al Mundo de las Creencias Andinas. La Cultura Pacopampa. Patorones de Enterramientos durante el Formativo en la Sierra Norte del Perú. *Museo Nacional de Antropología y Arqueología Boletín* 8: 17–24.
- 1987 Tradición y Cambio en las Sociedades Formativas de Bagua, Amazonias, Perú. *Revista Andina* 5: 457–487.
- Shady, R. and H. Rosas
 1976 Enterramientos en Chullpas de Chota (Cajamarca) (Serie: Investigaciones de Campo Número1). Lima: Museo de Arqueología y Antropología, Universidad Nacional Mayor de San Marcos.
- Shanks, M. and C. Tilley
 1987 *Social Theory and Archaeology*. Cambridge: Polity Press.
- Silva, J.
 1996 *Prehistoric Settlement Patterns in the Chillón River Valley, Peru*. Ph.D. Dissertation. Department of Anthrology, The University of Michigan.
- 清水正明・清水マリナ
 2010 「パコパンパ遺跡の石材と出土石製品の鉱物学的・岩石学的鑑定と産地同定」科学研究費補助金（基盤研究 A）『先史アンデス社会における権力の生成過程の研究』（研究代表者：関 雄二・国立民族学博物館教授）研究会配布資料。
- 清水正明・清水マリナ・中島真美
 2011 「パコパンパ遺跡の石材や出土した malachite, quartz などの産出地と遺跡への運搬ルートの推定」科学研究費補助金（基盤研究 A）『先史アンデス社会における権力の生成過程の研究』（研究代表者：関 雄二・国立民族学博物館教授）研究会配布資料。
- 2012 「パコパンパ遺跡に関する鉱物学的・岩石学的・地質学的・資源科学的研究：銅製錬方法の推定」科学研究費補助金（基盤研究 S）「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」（研究代表者：関 雄二・国立民族学博物館教授）研究会配布資料。
- Staller, J. E. (ed.)
 2008 *Pre-Columbian Landscapes of Creation and Origin*. New York: Springer.
- スチュワード, J. H.
 1979 (1955) 『文化変化の理論：多系進化の方法論』米山俊直・石田絃子訳（人類学ゼミナール 11）, 東京：弘文堂。
- Steward, J. H. and L. C. Faron
 1959 *Native peoples of South America*. New York: McGraw-Hill.
- Strong, W. D. and C. Evans Jr.
 1952 *Cultural Stratigraphy in the Viru Valley, Northern Peru: The Formative and Florescent Epochs* (Columbia University Studies in Archaeology and Ethnology 4). New York: Columbia University Press.
- Terada, K. and Y. Onuki (eds.)
 1982 *Excavations at Huacaloma in the Cajamarca Valley, Peru, 1979*. Tokyo. University of Tokyo Press.
 1985 *The Formative Period in the Cajamarca Basin: Excavations at Huacaloma and Layzón, 1982*. Tokyo: University of Tokyo Press.
 1988 *Las Excavaciones en Cerro Blanco y Huacaloma, Cajamarca, Peru, 1985*. Tokyo: Andes Chosashitsu, Departamento de Antropología Cultural, Universidad de Tokio.
- Tilley, C.
 1994 *A Phenomenology of Landscape: Place, Paths, and Monuments*. Oxford: Berg Publishers.
- Topic, J. R. and T. L. Topic
 1983 Coast-Highland Relations in Northern Peru: Some Observations on Routes, Networks, and Scales of Interaction. In R. M. Leventhal and A. L. Kolata (eds.) *Civilization in the Ancient Americas, Essays in Honor of Gordon R. Willey*, pp. 237–259. Albuquerque and Cambridge: University of New Mexico Press and Peabody Museum of Archaeology and Ethnology, Harvard University.
- Toshihara, K.
 2002 *The Cupisnique Culture in the Formative Period World of the Central Andes, Peru*. Ph.D. Dissertation, University of Illinois, Urbana.

- Trigger, B. G.
1990 Monumental Architecture: A Thermodynamic Explanation of Symbolic Behaviour. *World Archaeology* 22(2): 119–132.
- Tripcevich, N.
2007 *Quarries, Caravans, and Routes to Complexity: Prehispanic Obsidian in the South-Central Andes*. Ph.D. Dissertation. Santa Barbara: University of California.
- Trombold, C.
1991 An Introduction to the Study of Ancient New World Road Networks. In C. Trombold (ed.) *Ancient Road Networks and Settlement Hierarchies in the New World*, pp. 1–9. Cambridge: Cambridge University Press.
- 鶴見英成
2008a 『ペルー北部、ヘケテベケ川中流域アマカス平原における先史アンデス文明形成期の社会過程』東京大学大学院総合文化研究科提出博士論文。
2008b 「ペルー北部、諸河谷中流域の調査：形成期地域間ルート研究事始」『古代アメリカ』11: 61–73。
2012 「ペルー北部3河谷踏査概報」『古代アメリカ』15: 65–74。
- 宇野隆夫
2006 『実践 考古学 GIS：先端技術で歴史空間を読む』東京：NTT 出版株式会社。
- Wester, C., J. Martínez and A. Tandaypan
2000 *La Granja: Investigaciones Arqueológicas*. Lambayeque: Museo Nacional Brüning and Sociedad Minera la Granja S.A.
- Willey, G.
1953 *Prehistoric Settlement Patterns in the Viru Valley, Peru*. Bureau of American Ethnology, Bulletin 155. Washington D.C.: Smithsonian Institution Bureau of American Ethnology.
- ウィリー, G. R.・サブロフ J. A.
1979 (1974) 『アメリカ考古学史』小谷凱線宣訳, 東京：学生社。
- Willey, G. R. and J. A. Sabloff
1993 *A History of American Archaeology (Third Edition)*. New York: W. H. Freeman Company.
- Williams, L. C.
1985 A Scheme for the Early Monumental Architecture of the Central Coast of Peru. In C. Donnan (ed.) *Early Ceremonial Architecture in the Andes*, pp. 227–240. Washington D.C.: Dumbarton Oaks Research Library and Collection.
1988 Inicios de la Tradición Arquitectónica Andina. In V. Rangel Flores (ed.) *Arquitectura y Arqueología: Pasado y Futuro de la Construcción en el Perú*, pp. 27–34. I Simposio 13-16 de agosto de 1987, Chiclayo. Lima: Consejo Nacional de Ciencia y Tecnología.
- Wilson, D. J.
1988 *Prehispanic Settlement Patterns in the Lower Santa Valley, Peru: A Regional Perspective on the Origins and Development of Complex North-Coast Society* (Smithsonian Series in Archaeological Inquiry Vol.2). Washington D.C.: Smithsonian Institute.
- 渡部森哉
2004 『先スペイン期アンデスにおける社会動態と構造』東京大学大学院総合文化研究科提出博士論文。
- 山本 睦
2012 『先史アンデス形成期の社会動態——ペルー北部ワンカバンバ川流域社会における社会成員の活動と戦略から』総合研究大学院大学文化科学研究科博士論文。
2014 「先史アンデス形成期社会における人々の活動と戦略——ペルー北部ワンカバンバ川流域のセトルメント・パターンと景観」『年報人類学研究』4: 1–33。
- 山本 睦・伊藤裕子
2013 「ペルー北部とエクアドル南部における形成期の地域間ルートと地域間交流：GISによる加重コストルート分析を用いて」『古代アメリカ』16: 1–30。
- Yoffee, N.
1993 Too Many Chiefs? (or Safe Texts for the '90s). In N. Yoffee and A. Sherratt (eds.) *Archaeological Theory: Who Sets the Agenda?*, pp. 60–78. Cambridge: Cambridge University Press.